

# 上ノ原平原 A 遺跡

中津市文化財調査報告 第20集

1998

中津市教育委員会

## 例 言

一、本書は中津市教育委員会が1996年度に実施した上ノ原平原A遺跡の発掘調査報告書である。

一、調査はガソリンスタンド建設工事に伴うもので、調査、報告に要した費用は全て有限会社黒川石油が負担した。

一、調査団の構成は以下の通りである。

一、調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 前田 佳毅 (中津市教育委員会教育長)

調査事務 麻川 尚良 (中津市教育委員会市民文化センター館長)

田中布由彦 ( 同 係長)

富田 修司 ( 同 主任)

調査担当 高崎 章子 ( 同 主任)

発掘調査中、及び報告書の作成にあたり、下記の皆様より有益なご助言、ご指導を頂きました。記して謝意を表します。(敬称略)

清水宗昭、渋谷忠章、高橋徹、村上久和、小林昭彦、小柳和宏、栗原眞、豊田徹士

(大分県教育委員会)、玉永光洋、坪根伸也 (大分市教育委員会)、小倉正五 (宇佐市教育委員会)  
中村修身、梅崎忠司、佐藤浩司 (北九州市教育文化事業団)、矢野和昭 (新吉富村教育委員会)

一、文章中、実測図、図版の遺物Noは、全て土器観察表、石器観察表の遺物Noと共通する。

一、遺物整理、及び報告書作成には秋吉三和子、中野温子、岩崎弘子、中島二三恵 (中津市歴史民俗資料館) の協力を得た。

一、遺物の実測、トレースは高崎章子、遺構のトレースは金丸孝子 (中津市歴史民俗資料館) が行った。

一、遺物の写真は上記資料館職員のほか、花崎徹 (中津市歴史民俗資料館技師) の協力を得た。

一、本書の執筆、編集は高崎が行った。

一、発掘調査参加者は以下の皆さんである。

山縣信夫、中和代、田原文子、徳永賀子、植山ヨシカ、今永キク子、植山松枝、松本勲、植山京子、辛島雅美、黒川洋美、草野郁雄、黒川みゆき、神崎文子、長岡久美子、小倉真理、植山トミ子、湯口ヒロ子、寺内勝美、辻原霞

# 目 次

第1章 地理と歴史的環境 .....	1
第2章 上ノ原平原遺跡の調査	
1. 調査の経緯と概要 .....	2
2. 遺構の概要 .....	5
(1) 土壇、竪穴 (SK-1~73)	
(2) 住居跡 (SH-1)	
(3) 溝 (SD-1,2,3,4)	
3. 出土土器の分類 .....	22
第3章 小結	
1. 遺物について .....	40
2. 遺構について .....	42
(1) 土壇、竪穴遺構について	
(2) 遺構の先後関係	
3. おわりに .....	43
図 版 .....	47

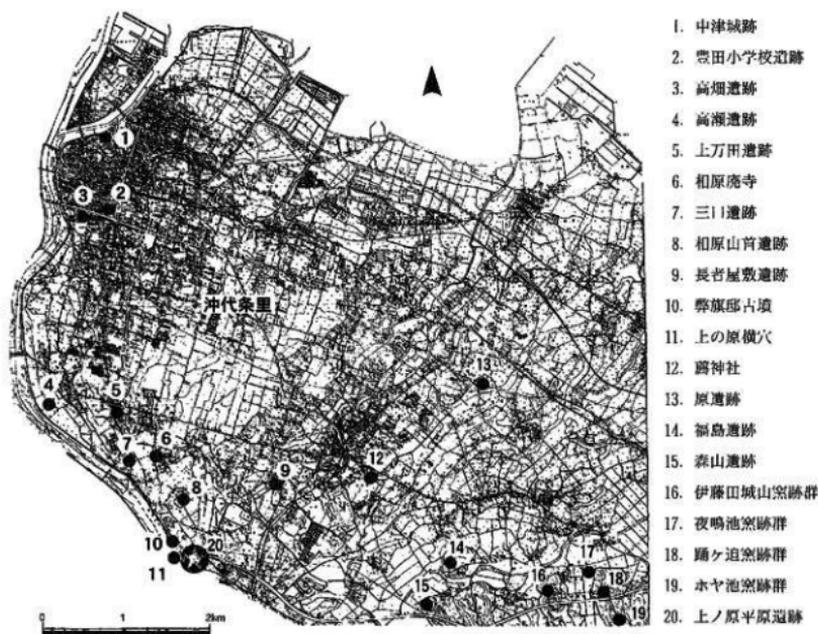


図1 中津地方主要遺跡分布図

## 第一章 中津地方の地理と歴史的環境

中津市は大分県の最北端の市で、山国川をはさみ福岡県と接する。市域は55.67km<sup>2</sup>である。南から流れてくる山国川は扇状地をつくり北で周防灘に流れ出す。扇状地は市の西半分をしめ、沖代平野とよばれており、東には洪積台地の下毛原台地が広がる。古代の人々は西の山国川、東の犬丸川沿いに遺跡を残している。縄文時代早期～晩期には犬丸川沿いの黒水遺跡、後期には同じく犬丸川沿いのボウガキ遺跡、植野貝塚、山国川沿いの三光村佐知遺跡、高畑遺跡などが知られる。弥生時代になると遺跡の範囲は拡大していき、台地上の大集落や、沖積平野内の低地に足跡をたどることができる。なかでも森山遺跡は台地上に広がる弥生時代前期末～後期の集落の全容を検出できた遺跡として知られる。また近年福島台地上でも調査が行われ、中期の集落や墓城が確認されている(福島遺跡)。古墳時代には沿岸部や山国川沿いに古墳・横穴が築かれ(弊旗邸古墳、上ノ原横穴墓群など)、微高地には住居が作られる。沖積平野の低湿地では水田も確認されている。生跡遺跡としては南東部に大規模な野依伊藤田室跡群が作られる。白鳳寺院の相原廃寺周辺の自然堤防上には豪族の拠点集落である三ノ遺跡があり、相原の集落をみおろす台地上の相原山首遺跡からは豪族たちの墓城が発見されている。奈良時代には沖代平野の条里水田から収穫された米を収納する正倉と目される長者屋敷遺跡が官道近くの台地に建設される。条里地割りは開発の波におされながらも現在までその姿をとどめており、古代以来の収穫を我々に送りつづけている。

## 第二章 上ノ原平原A遺跡の調査

### 1、調査の経緯と概要

上ノ原平原遺跡は中津市の南部、三光村との県境に位置する。調査区は北大バイパス沿いで、山国川にほど近く、上ノ原横穴墓群からは東南約300mと近接している。1996年の2月に民間のガソリンスタンド建設に伴う試掘調査を実施した。その際、若干の弥生土器片とピットを確認したことから、1997年9月より本調査を実施した。調査対象区域は標高約39mの低丘陵で、面積は約1,927㎡であったが、西側は大きく削平をうけていることから、本調査対象地は東側の約600㎡のみとした。以前調査区の北側を走るバイパス工事の際、大分県教育委員会による試掘調査が行われているが、明確な遺構は確認されていない。また、調査区東側でも道路新設にともない、地下げされることになり、三光村教育委員会により試掘調査が行われたが、こちらもすでに削平されていたと思われ、遺構は未確認であった。調査区南側は掘り下げられ民家がたっており、調査区は四方をカットされた浮島のような状態であった。

現地は草木がおいしげり、重機でたおしながら掘削した。その結果、大小のピットや土壇、住居跡を検出することができた。遺構検出面は木の根や建造物による攪乱が見られた。また遺構上面は削平をうけており、本来の深さよりかなり浅くなり床面が露出しているものも多かった。調査区内は北西側が標高が高く、東南にむけてさがる緩斜面である。遺構は高い方に集中しているようにみえるが、北側と東南側はさらに削平をうけており、本来は調査区全面に遺構が存在していたと思われる。

調査区南側には東西に県道がはしっている。当遺跡を調査中、大分県教育委員会により、県道拡幅工事に伴う発掘調査が行われた。その際、当遺跡と同様の方形や円形の堅穴群、住居跡が発見された。両者は同一の遺跡であるとの共通の見解より、遺跡名を同じ上ノ原平原遺跡とすることとし、中津市教育委員会の調査区をA地点とした。



図2 調査区位置図 (S=1/3000)

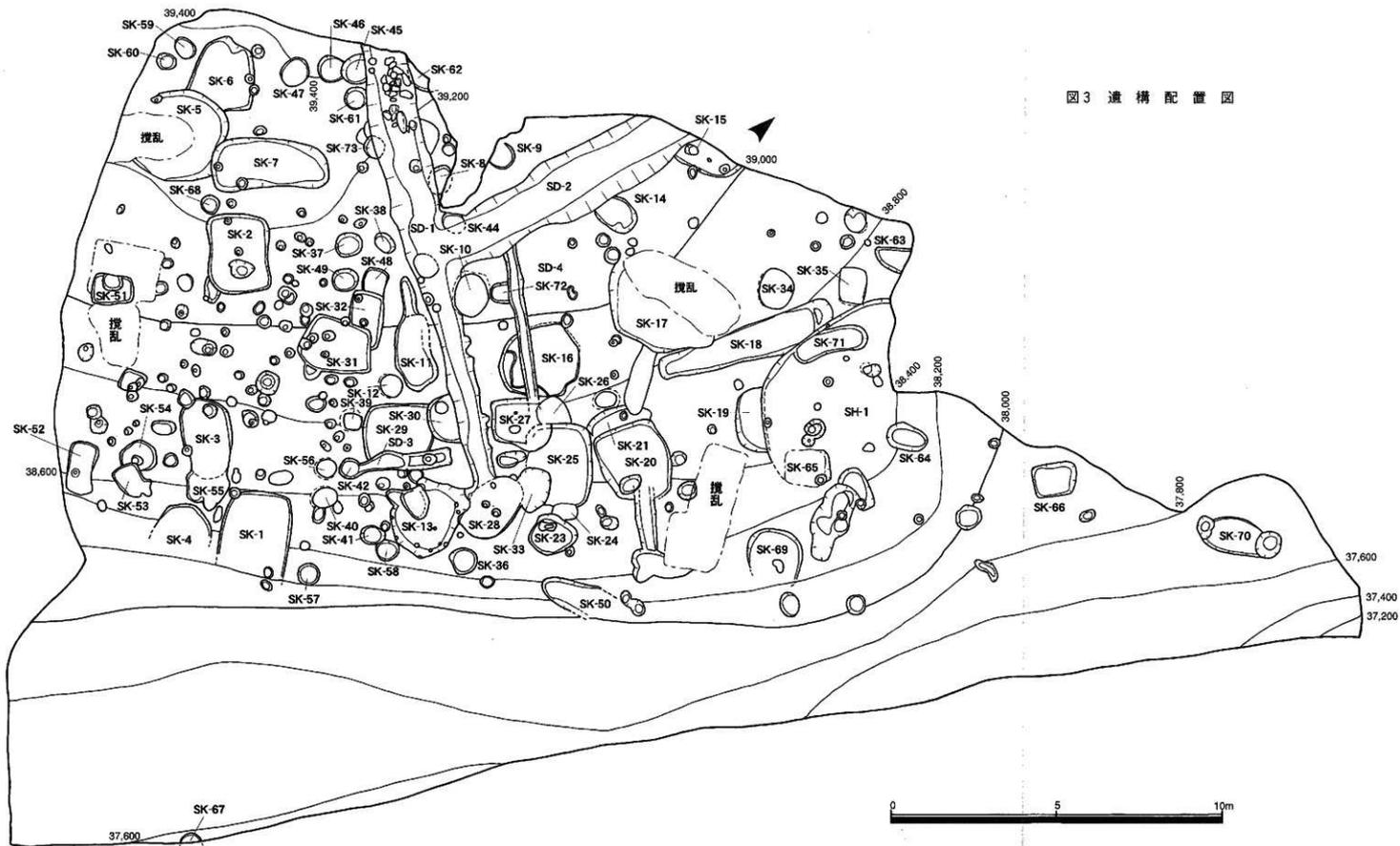


図3 遺構配置図

## 2、遺構の概要

検出された遺構は竪穴、土壇群、住居跡、溝、ピットである。

### (1) 土壇、竪穴

本調査区の主要遺構である。削平されている西側斜面上に遺構のない空白地があるが、調査区東端にかろうじてSK-67が確認できたことから、本来は続いていたと思われる。遺構には方形のもの、円形のもの、大きいもの、小さいものと、形、大きさとも様々あるが、遺構の上面がカットされているものが多く、現在浅い土壇状のものでも、竪穴であった可能性も大きいため、あえてまとめて掲載した。個別の説明は観察表(表2)で示した。観察表では、壁面が直立、あるいは逆台形になることが明白なものを竪穴、それ以外は全て土壇と記した。

土壇、竪穴の内、不定形のものや削平により全形が不明なものをはじめ、円形と方形のもの床面積を図4に示した。円形は0.1~0.6㎡の小型円形遺構に著しい集中がみられたほかは、1.2~5.3㎡の間に散在していた。しかしこれは残りの良いもののみをあつかったため、資料が増えればSK-10,34などの中型、SK-13,19などの大型に分かれると思われる。方形は3.6~4.6㎡(大型)、2.2~2.6㎡(中型)、0.8~1.4㎡(小型)にそれぞれ集中していた。これらの遺構配置を方形、円形(大型、中型)、小型円形別に図5に示した。以下、特徴的な遺構を解説する。

方形遺構は、上面が削平され、わかりにくいものもあるが、基本的に隅丸方形の平面形態を持ち、床面はフラットで、壁は垂直に立つ竪穴である。配置を見ると、小型のものはちらばっているが、大型のものは調査区中央やや左寄りにかたまっており、山肌の傾斜に添い、縦長にほりこまれている。SK-2に底面直径約20~30cm、深さ約40cmの柱穴が一つほりこまれている他は明確な柱穴をもつものはない。

大型、中型の円形遺構は床面がレンズ状の上壇と、壁面がまっすぐ、または断面逆台形やフラスコ状にたちあがる竪穴がある。かたよりは見受けられず、まんべんなく調査区にちらばっていた。SK-13は中央にむかって深くなる、レンズ状の土壇である。外周ラインが乱れているが、これは台地が後世に削平をうけた段落ちの部分に位置するため、周囲が複雑に削られた結果である。他の遺構と異なる特徴は多数の柱穴を持つことである。直径約20cm、深さ約20cmのピットが遺構の外周に添いほぼ等間隔に計7個検出されたが、本来は8個であろう。SK-13からは、当遺跡中古相を呈す土器が出土している。

SK-19は床がフラットで壁が垂直の竪穴である。北側がSH-1に削平されているが、南側壁沿いには壘が圧迫されつぶれた状態で出土しており、使用当時の位置を保つと思われる。床面中央には底面直径約20cm、深さ約60cmの柱穴が一つある。円形遺構のSK-16も同じく床面中央に柱穴を一つ持つ。底面直径約25cm、深さ約30cmである。床面はフラットで、壁は垂直一部ややフラスコ状を呈す竪穴である。南東の壁際に高さ6cmほど白色粘土がしかれていた。遺物はわずかな小片があるのみで、34の壘は最上層で、攪乱をうけた場所にあり、流れ込みの可能性が高い。

SK-10は床面フラットで、深めのフラスコ状を呈す。床から10~20cm黄褐色の粘土がしかれ、その上に土器小片と石包丁の破片がのっていた。

一方、小型円形遺構は全て床面はフラットで、壁面は垂直、またはフラスコ状にたちあがる竪穴である。柱穴は認められない。調査区中央やや左よりに高所から低所まで帯状に分布していた。台

地の高い方に分布するものは、上面の削平が著しく、浅いものが多い。土層観察の結果、レンズ状の堆積は認められず、出土遺物はほぼ全てが一括廃棄の状態である。遺物は床面か遺構の中位にまとまって出土した。いずれも破砕されたもので、特にSK-46、73はかなり小片にこわされており、床面に密に押し込まれていた。SK-46などは遺構の依存状態の悪さ、床面積の小ささからは意外なほど、大型で、多様な土器が小片となって出土し、良好な一括資料となった。これらは当遺跡中最も新相を示し、前期末もしくは中期初頭までくだと考えられる。またSK-73からは、土器小片とともにドングリも出土している。

## (2) 住居跡 (SH-1)

推定直径約280cm、現存の深さ約25cmの円形住居である。遺構の北側、東側は削平を受けているが、西から南にかけてわずかが壁が残存する。SK-71の上面をカットし、SK-18、19の壁面を切っている。8本の柱穴が確認できるが、本来10本柱であったと思われる。柱穴は直径約20cm深さ約70cm。SK-64は、住居跡の中央に位置することから、炉跡であろうか。

## (3) 溝 (SD-1,2,3,4)

SD-1は調査区を西の調査区外から東へ、台地の高所から低所へ走る溝で、長さ約14mが検出された。断面は逆台形を呈し、東側が細くなり、消滅する。SD-2も同様の断面逆台形の溝で、北は調査区外へ続き、南はSD-1と合流する。土層の切り合いは認められず、ほぼ同時期に埋まったものである。SD-1の最西端では、溝に河原石が多数落ち込んでいた。土壌、堅穴を切って掘削されており、溝底には切られた土壌、堅穴より崩落した遺物が散見された。採取できたのは前期末～中期初頭の土器小片のみで、本来この溝の時期に相当するのかどうか、不明である。SD-3,4は幅約40cmの浅い断面逆台形の溝である。やはり、他の土壌、堅穴を切っているが、時期は不明である。また、SD-4はSD-2に接するが、埋土がほぼ同じで、切り合いはわからなかった。

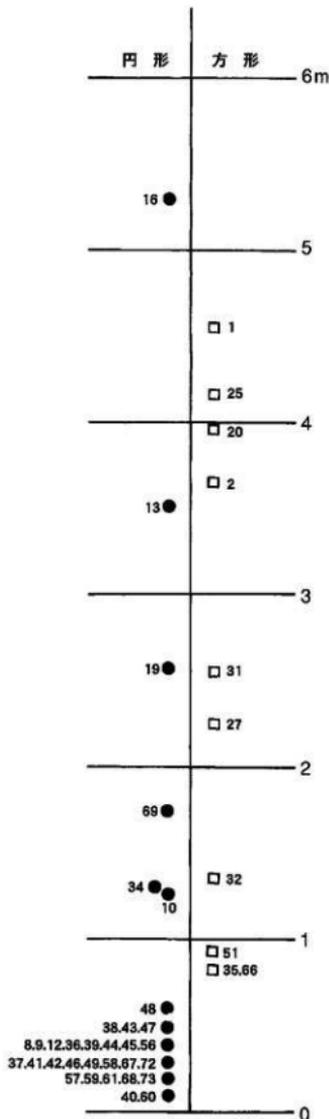


図4 土壌の床面積別分布図

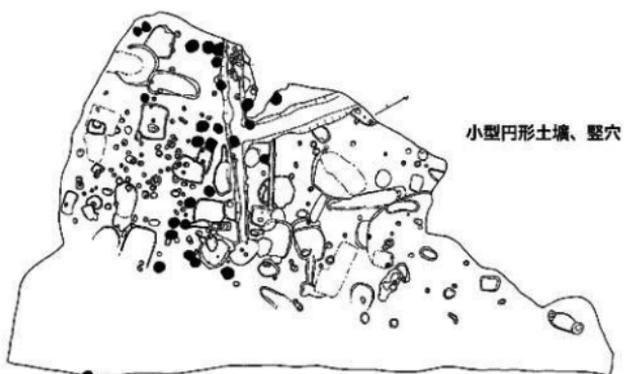
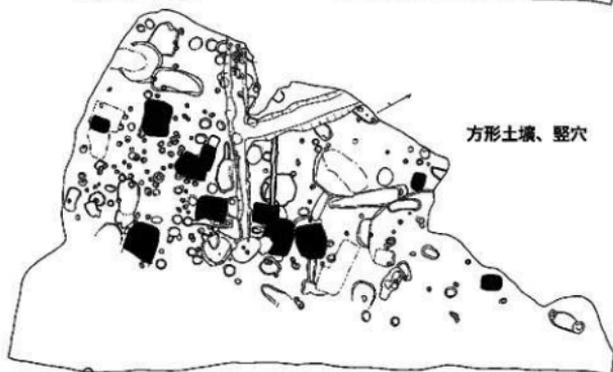
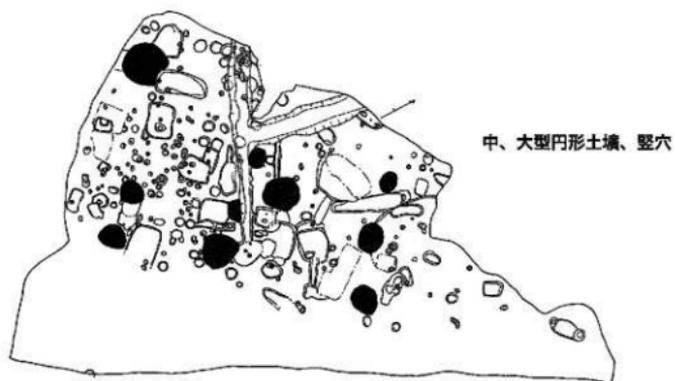


図5 形態別土坑分布図

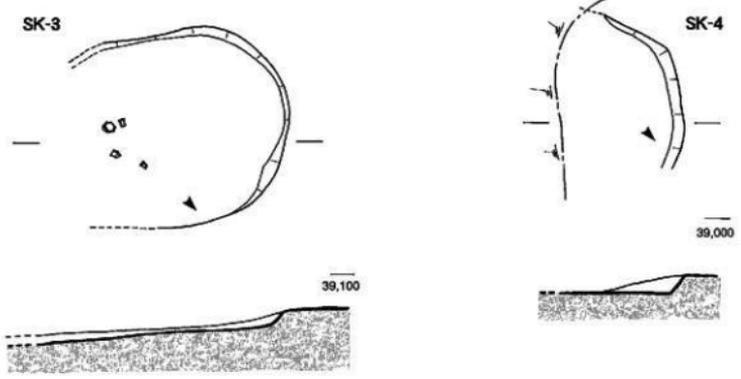
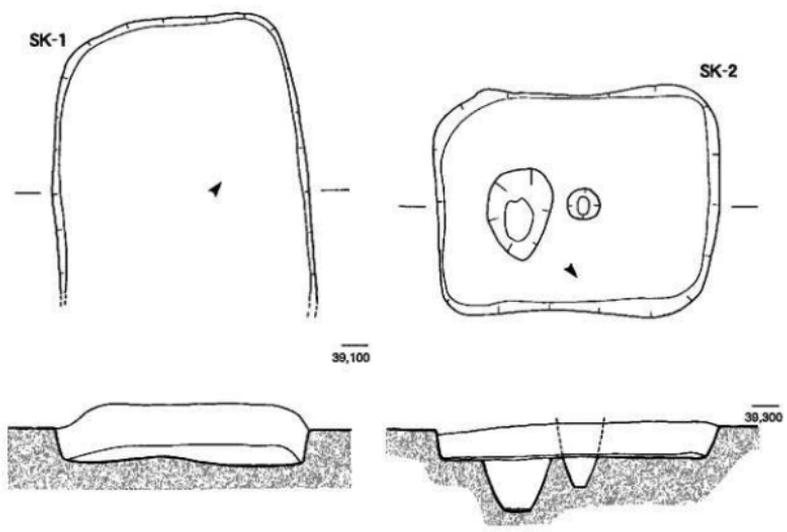


図6 土壇、竪穴実測図 (S=1/40)

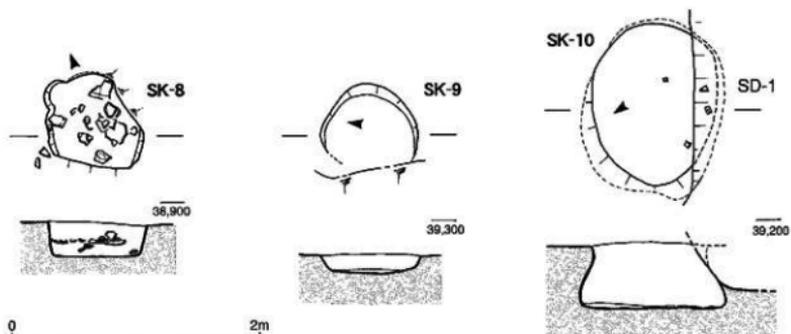
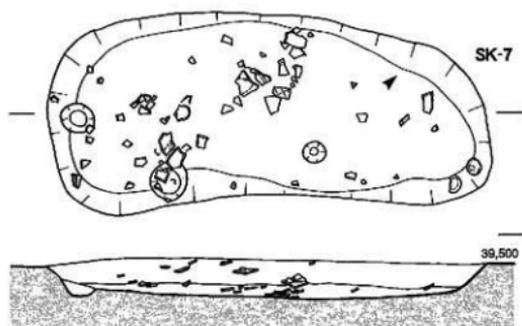
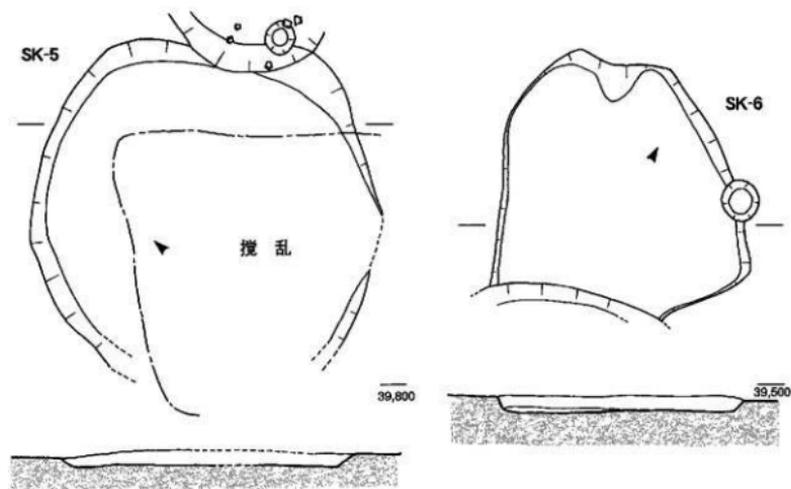


図7 土坑、竪穴実測図 (S=1/40)

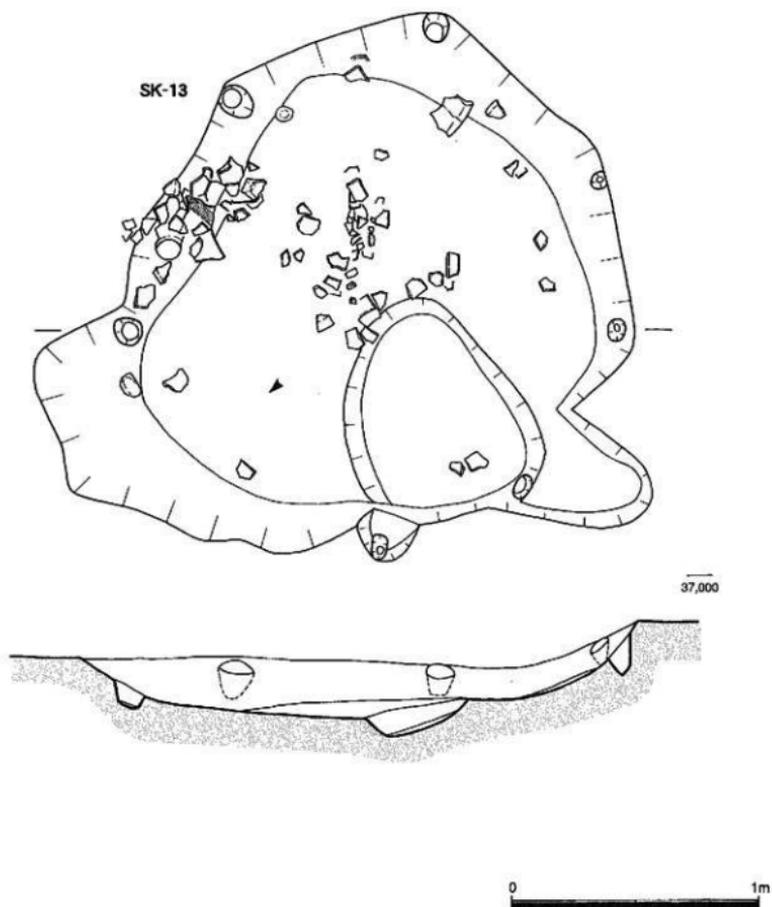
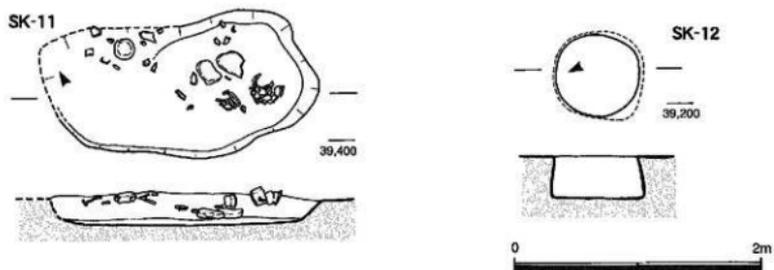


図8 土坑、竪穴実測図 (S=1/20、1/40)

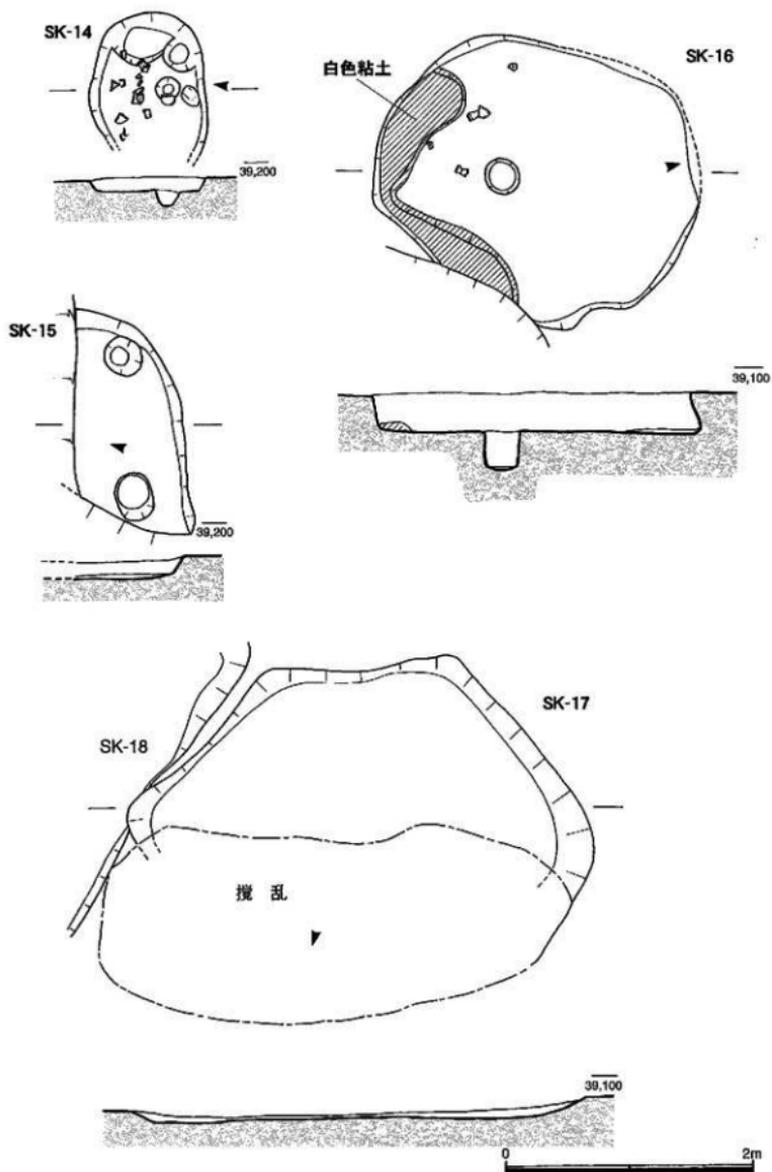
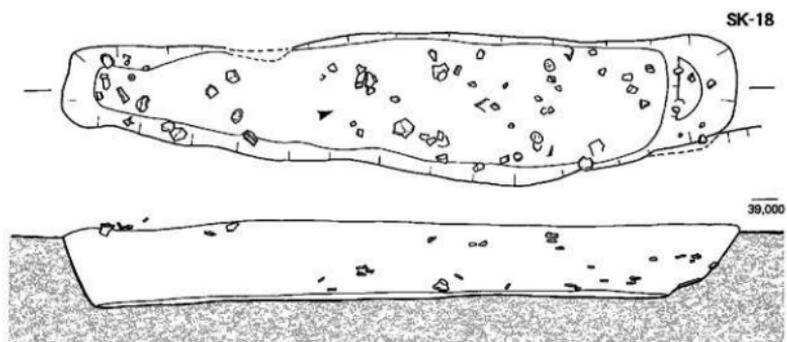


图9 土壤、竖穴实测图 (S=1/40)



0 2m

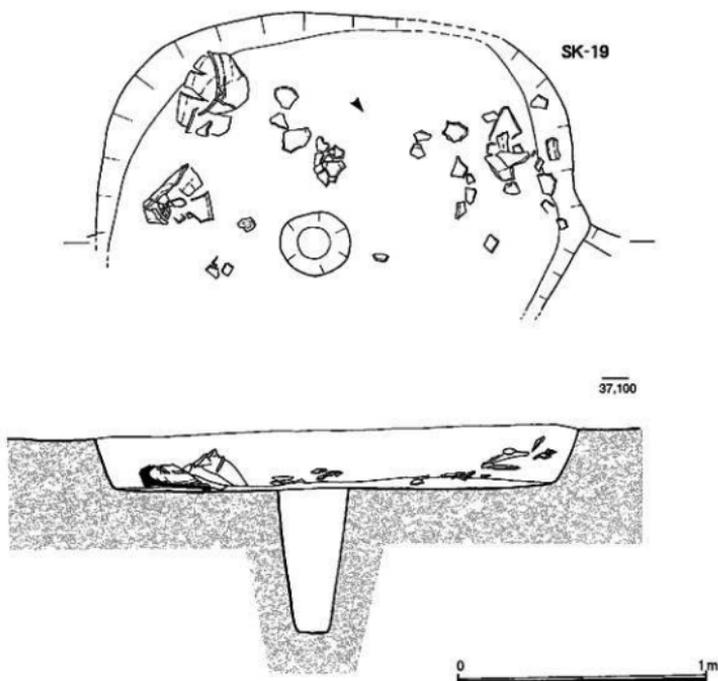


图10 土坑、竖穴实测图 (S=1/20、1/40)

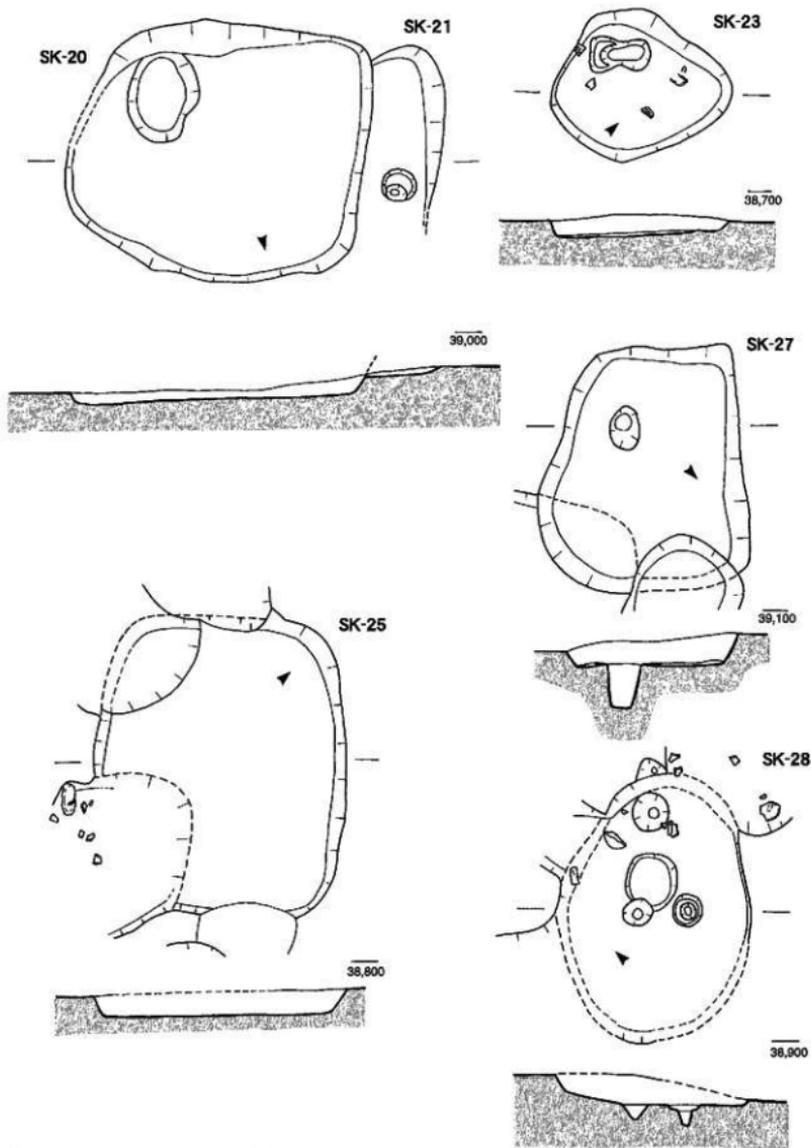


图11 土壤、竖穴实测图 (S=1/40)

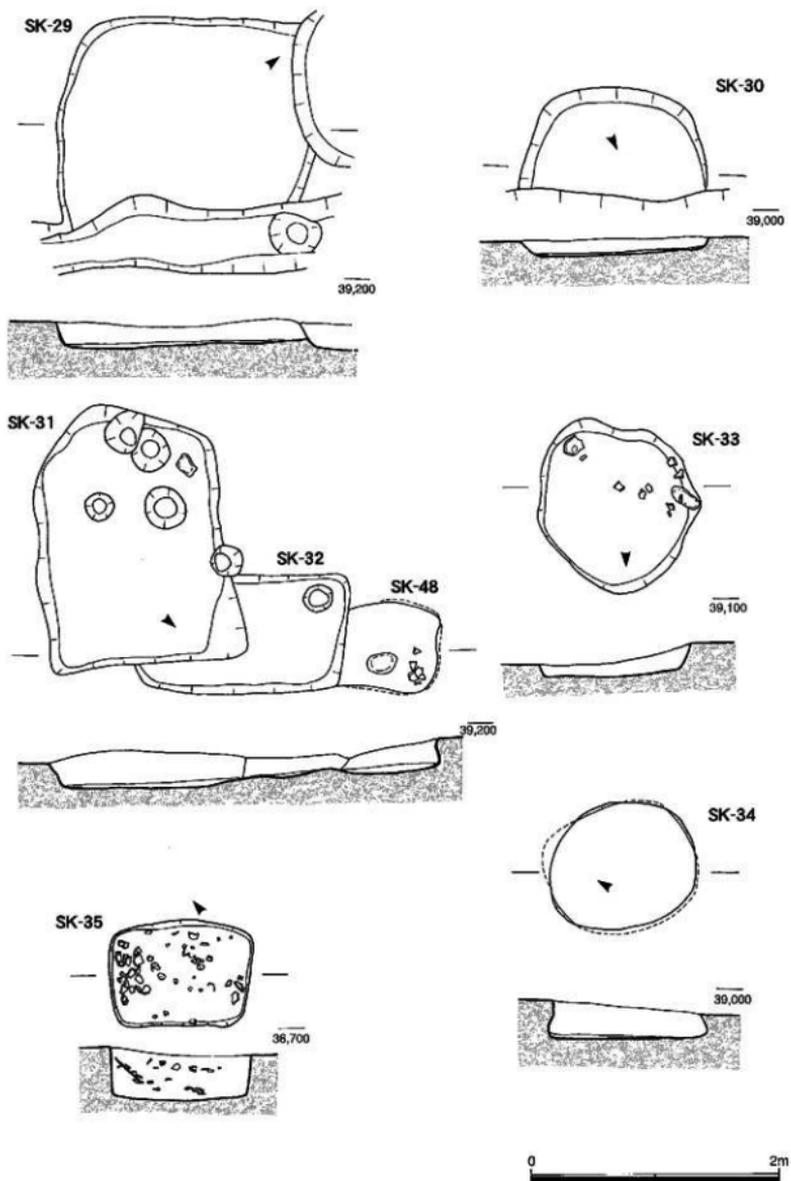


図12 土坑、竪穴実測図 (S=1/40)

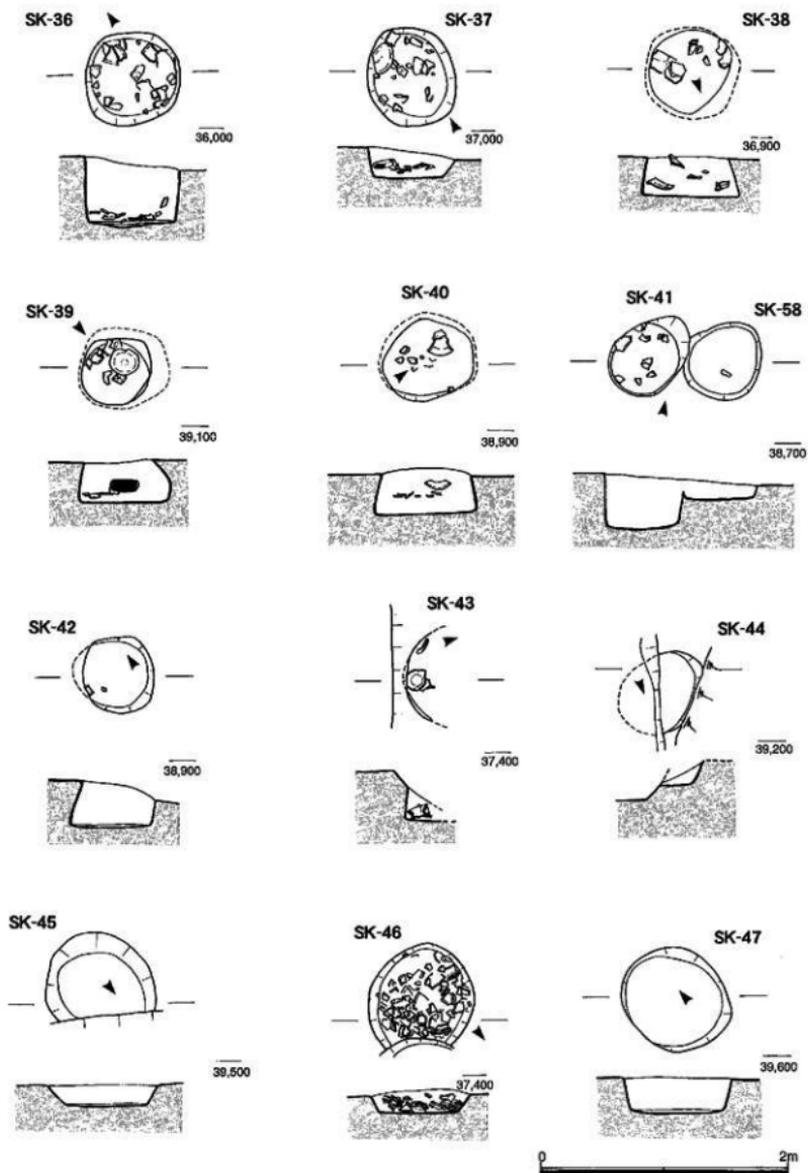


图13 土坑、竖穴实测图 (S=1/40)

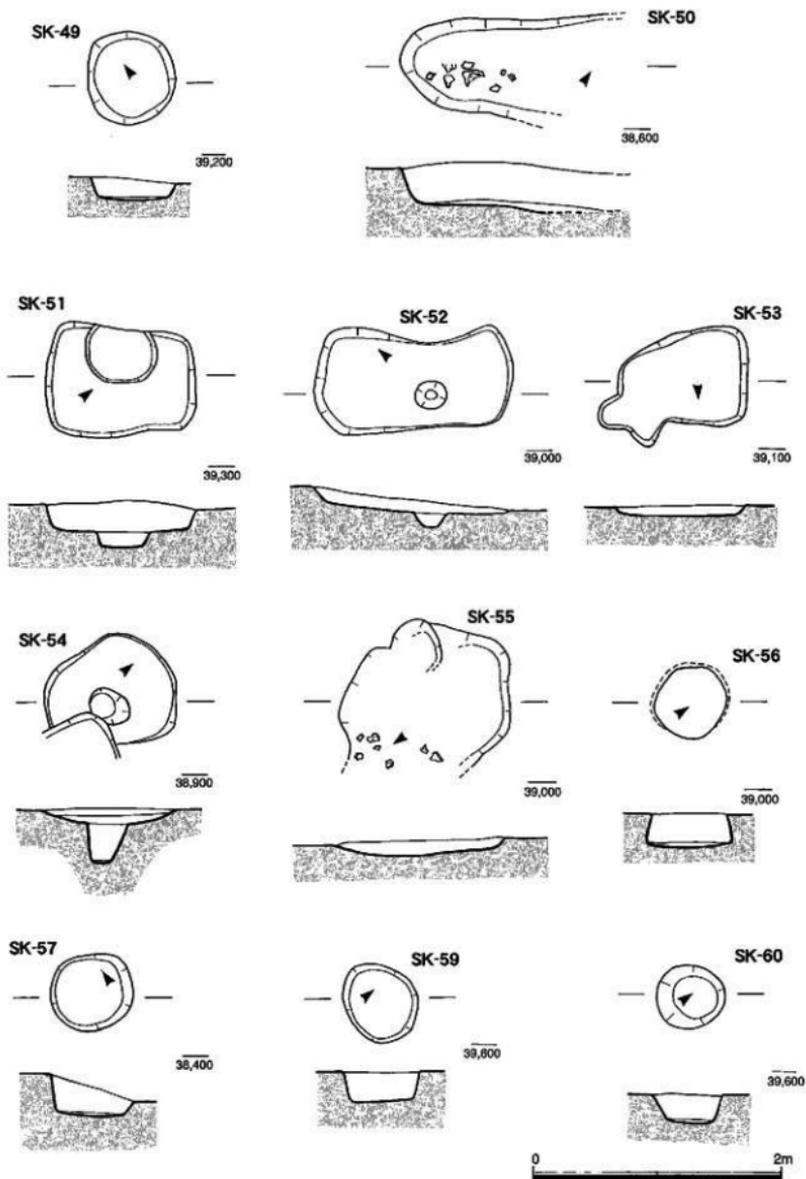


图14 土坑、竖穴实测图 (S=1/40)

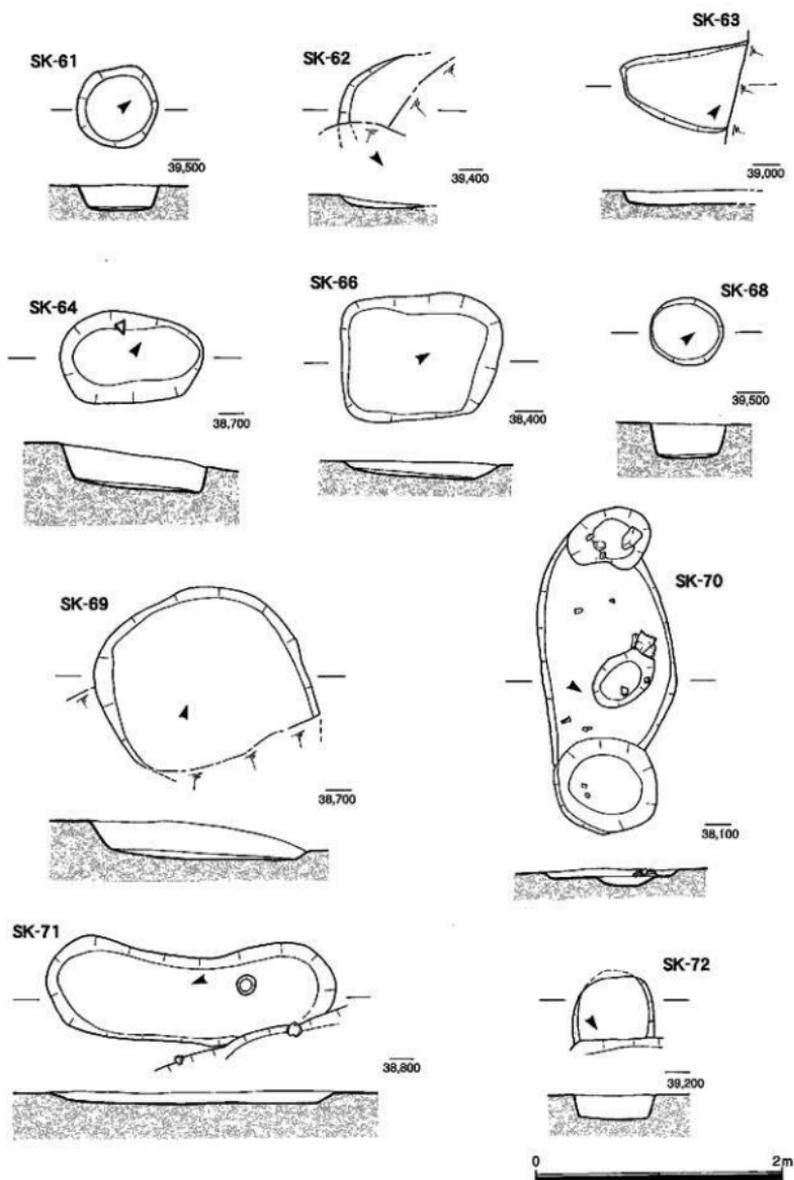


图15 土坑、竖穴实测图 (S=1/40)

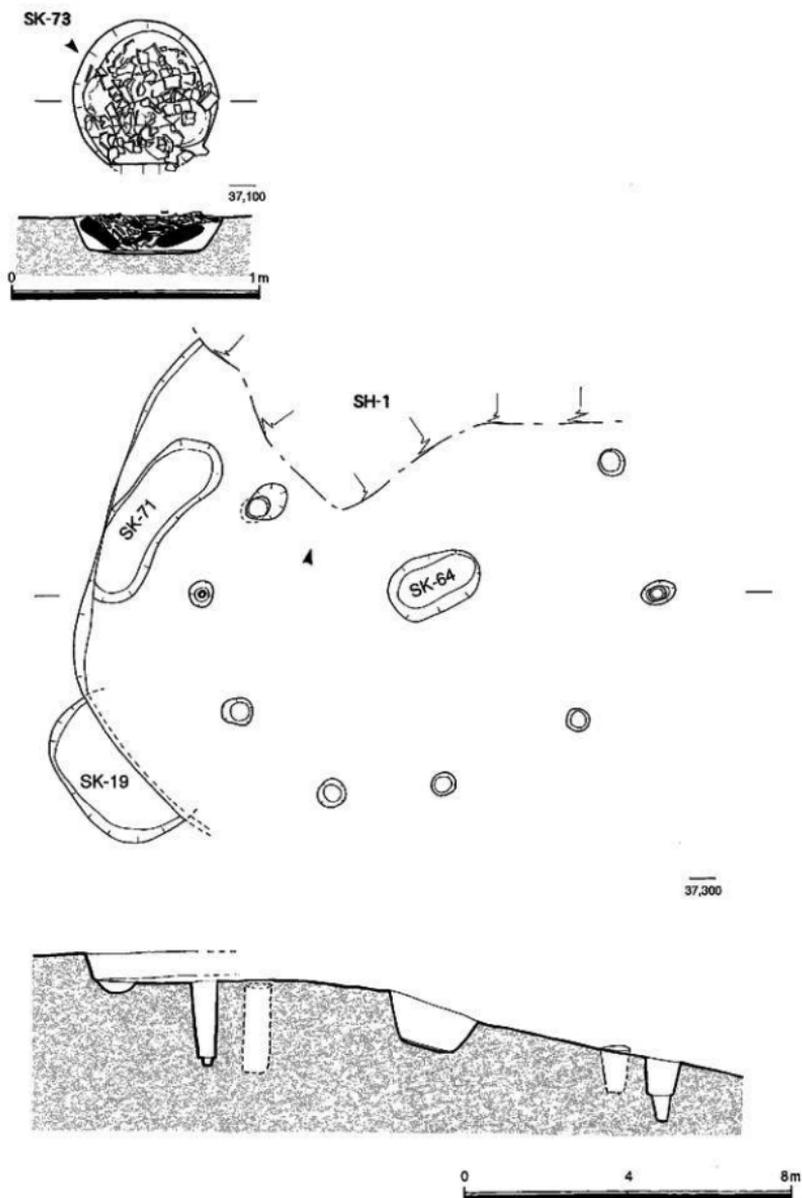
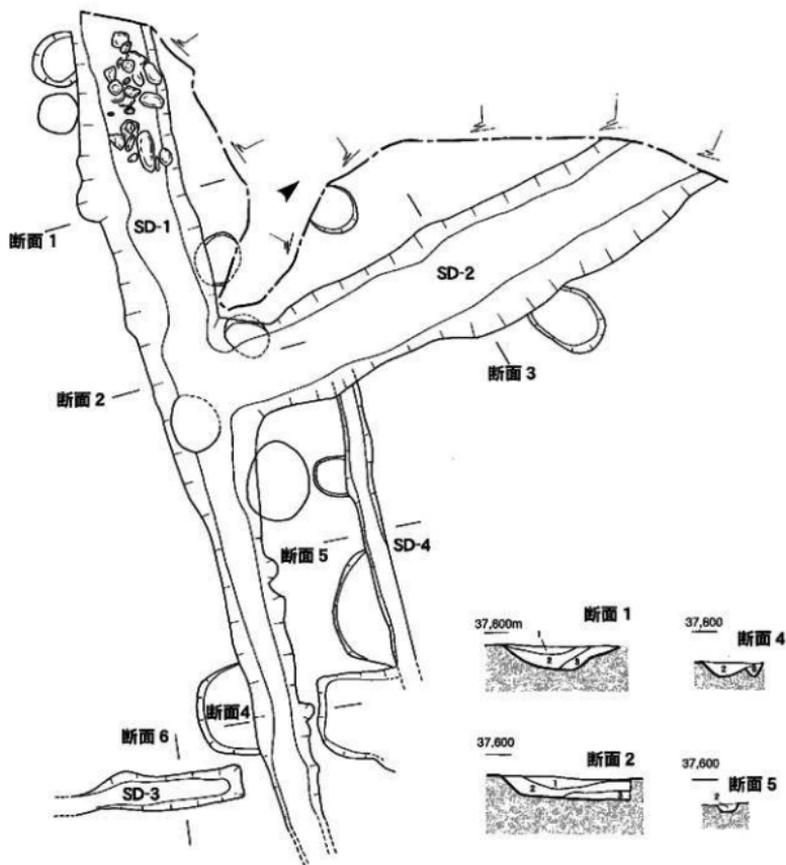


图16 竖穴住居跡実測図 (S=1/20、1/60)



十層観察

1. やわらかい黒色土
2. 褐色土・遺物片含む
3. 2よりやや暗い褐色土・黄色粘土粒含む
4. 明茶褐色土・かたい
5. 黄褐色土・やや粘質・かたい
6. やや、やわらかい黒褐色土

図17 溝実測図 (S=1/80)

表2 遺構観察表

遺構 SK	形状	床面規模 (m)				備考
		直径	タテ	ヨコ	面積	
1	方形竪穴	(2.30)	1.98	4.55	0.42	南壁は削平される。小片土器のみ
2	方形竪穴	2.20	1.66	3.65	0.30	柱穴(深さ45cm)1つあり。小片土器のみ
3	円形土壇?	(1.90)	1.50	2.85	0.10	南壁は削平される。小片土器のみ
4	円形土壇?				0.14	南壁は削平される。小片土器のみ
5	円形土壇?	2.70		5.72	0.10	壁面の2つのピットは、SK-13のような柱穴か? 中心部攪乱。 SK-7に切られる。小片土器のみ
6	不定形土壇	1.90		2.83	0.12	SK-5に切られる。小片土器のみ
7	楕円形土壇	3.30	1.30	4.29	0.30	土器多数。SK-5を切る
8	円形竪穴	0.70		0.38	0.28	遺物は床面より10cm上に一括廃棄。SD-1に切られ。北壁は削平される
9	円形竪穴	0.72		0.41	0.15	西壁削平される。小片土器のみ
10	円形竪穴	1.27		1.27	0.54	台形。焼土。炭まじりの下層の上に。土器小片と石包丁破片あり。 SK-72を切り。SD-1に切られる
11	楕円形土壇	(2.00)	0.90		0.26	一括廃棄
12	円形竪穴	0.74		0.43	0.34	台形。小片土器のみ
13	円形土壇	2.12		3.53	0.40	SK-28に切られる?。一括廃棄。壺。甕などまとまって出土。削平をうける。壁面に推定8コのピットがめぐる。
14	不定形土壇?	(11.0)	0.80		0.10	SD-2に切られる。小片土器のみ
15	?				0.20	SD-2に切られる。北壁は削平される。小片土器のみ
16	円形竪穴	2.60		5.30	0.35	床面壁面に粘土あり。台形。中央に深さ30cmの柱穴あり。 SK-27に切られる。小片土器のみ
17	円形土壇	(3.14)		(7.74)	0.14	攪乱を受ける。SK-18を切る。小片土器のみ
18	溝状竪穴	4.05	0.96	44.64	0.60	SK-17とSH-1に切られる。多数の小片土器が一括廃棄。
19	円形竪穴	1.80		2.54	0.25	中央に深さ60cmの柱穴あり。SH-1に切られる。土器床面置き去り
20	方形竪穴?	2.26	1.76	3.97	0.14	SK-21を切る。小片土器のみ
21	不定形土壇	1.88	?		0.06	SK-20に切られる。小片土器のみ
23	不定形土壇	1.34	1.00		0.18	SK-24を切る。小片土器のみ
24	不定形土壇					SK-23に切られる。小片土器のみ
25	方形竪穴	2.26	1.84	4.15	0.20	SK-24, 27, 33に切られる。床面より15cm上に遺物一括廃棄。
26	不定形土壇					SK-25を切る。小片土器のみ
27	方形竪穴	1.88	1.20	2.26	0.26	SK-26に切られ。SK-25を切る。小片土器のみ
28	楕円形土壇?	2.00	1.48		0.22	SK-13を切る?。SK-33, SD-1に切られる。小片土器のみ
29	方形竪穴		2.00		0.20	SK-30, SD-3に切られる。小片土器のみ。
30	円形竪穴土壇?				0.12	遺物は床面より10cm上。SD-1に切られる
31	方形竪穴	1.90	1.34	2.55	0.30	SK-32を切る。小片土器のみ
32	方形竪穴	1.62	0.84	1.36	0.14	SK48を切り。SK-31に切られる。小片土器のみ
33	円形土壇?	1.10		0.94	0.20	SK25を切る。小片土器のみ
34	円形竪穴	1.28		1.29	0.30	台形。小片土器のみ
35	方形竪穴	1.09	0.77	0.83	0.40	一括廃棄。小片土器多数
36	円形竪穴	0.68		0.36	0.53	遺物は床面に一括廃棄
37	円形竪穴	0.65		0.32	0.25	遺物は床面に一括廃棄
38	円形竪穴	0.78		0.48	0.30	台形。遺物上面から床面まで散らばる。一括廃棄
39	円形竪穴	0.68		0.36	0.28	台形。遺物は床面に一括廃棄
40	円形竪穴	0.42		0.14	0.33	台形。遺物は床面より20cm上に一括廃棄
41	円形竪穴	0.58		0.26	0.44	小片土器のみ
42	円形竪穴	0.64		0.32	0.38	台形。上面をSD-3にカットされる。小片土器のみ

遺構	形状	床面規模 (m)					備考
		直径	タテ	ヨコ	面積	深さ	
43	円形壁穴	(0.80)			0.50	0.26	台形、SD-1に切られる遺物は床面に一括廃棄
44	円形壁穴	(0.70)			0.38	0.20	SD-1に切られ、南壁削平される。小片土器のみ
45	円形壁穴	0.68			0.36	0.16	SD-1に切られる。SK-46を切る。小片土器のみ
46	円形壁穴	0.64			0.32	0.15	多数の小片土器が床面に密に詰まっている
47	円形壁穴	0.76			0.45	0.30	小片土器のみ
48	円形壁穴	0.82			0.58	0.24	台形。壁104はSK-37.40.48出土のものが接合
49	円形壁穴	0.60			0.28	0.18	小片土器のみ
50	不定形土塊		?	0.60		0.36	土器床面より出土。東壁削平される
51	方形壁穴		1.10	0.85	0.94	0.22	床面にほりこみあり。小片土器のみ
52	不定形土塊		1.50	0.66	0.99	0.12	小片土器のみ
53	不定形土塊		0.96	0.74	0.71	0.08	小片土器のみ
54	円形土塊	1.00			0.79	0.14	小片土器のみ
55	不定形土塊	1.40			1.54	0.12	小片土器のみ
56	円形壁穴	0.70			0.38	0.26	台形。小片土器のみ
57	円形壁穴	0.54			0.23	0.30	小片土器のみ
58	円形壁穴	0.55			0.29	0.16	小片土器のみ
59	円形壁穴	0.50			0.20	0.24	小片土器のみ
60	円形壁穴	0.36			0.10	0.24	小片土器のみ
61	円形壁穴	0.52			0.21	0.20	小片土器のみ
62	不明?						壁の大半は削平される。小片土器のみ
63	楕円形土塊			0.60		0.10	東壁は削平される。小片土器のみ
64	楕円形壁穴		1.04	0.42		0.30	SH-1の炉か?小片土器のみ
65	不明?						
66	方形壁穴土塊?		1.04	0.80	0.83	0.14	小片土器のみ
67	円形壁穴	0.60			0.28	0.52	南東壁削平される。小片土器のみ
68	円形壁穴	0.50			0.19	0.28	小片土器のみ
69	円形壁穴?	1.50			1.76	0.30	南東壁削平される。小片土器のみ
70	不定形土塊			1.00		0.05	中心部の窪みが被熱しており焼土あり
71	不定形土塊		2.10	0.56		0.10	上面をSH-1にカットされる
72	円形壁穴	0.56			0.27	0.20	SK-10を切る。SD-4に切られる。小片土器のみ
73	円形壁穴	0.48			0.18	0.15	SD-1に切られる。床面に遺物小片が密に詰まる。ドングリ多数出土。

### 3、出土土器の分類

当遺跡出土遺物はその大半が土壇、竪穴出土のものである。遺物は一括廃棄されているものと、流れ込みのものがある。小竪穴は、土層観察より一括廃棄が多い。しかし、床面のみが残っているものについては、流れ込みであるか、一括廃棄であるかは判断できない。

遺跡出土の土器は壺、甕、鉢、蓋、器台などがあるが、その大半は壺と甕が占める。壺対甕は1:4である。鉢は数点、蓋、器台はともに1点であった。削平された土壇が多いのと、破砕した遺物が多いため、全形が復元できた遺物は少なかった。

以下壺と甕の分類を試みたが、主として、口縁部の残っているものを対象とし、底部のみのものは省略した。ただし、壺、甕とも器面ができており、調整不明瞭なものも多く、文様の有無は厳密ではないことを断っておきたい。

壺は以下のA～F類に分類した。

A類：いわゆる板付系の壺で、底部は厚く、胴部は球状に強く張り、頸部は直線的に内傾する。胴部と頸部の境は段を削り出す。口縁部は稜を持ち短く外反し、端部はわずかに屈曲する。28

(Aa類)は器面が非常にあれているため明確ではないが、口縁部に刻目を施し、肩には一条の沈線で区切られた文様帯を有す。

59 (Ab類)はA類の退化形態といえ、口縁部、頸部、胴部の境に明瞭な境界線をもたず、プロポーションに緊張感がない。外面全体に刷毛目がのこり、装飾をもたない。

B類：A類に類似するが、頸部はA類よりよりひきしまり、わずかに弧を描く。口縁部は稜を持たず短く外湾する。29 (Ba類)は頸部と胴部の境に段を削り出す。51、(Bb類)は頸部と胴部を沈線で区切る。いずれも胴部上方に沈線で区切られた文様帯をもつ。29はへらで、51は貝殻押圧による羽状文をほどこす。口縁部が欠損しているが、5、7 (Bc類)はより球状の胴部を形成する。

C類：90が相当するが、胴部は不明である。頸部は、直線的に内傾し、口縁部はA、B類より長く、外反する。頸部と胴部の境には三角突帯をはりつける。また、頸部と口縁部の境には、外面に一条の沈線をめぐらす。6も頸部と胴部の境に三角突帯があり、このタイプの大型のものと思われる。

D類：79一点である。小型で、縦長のプロポーションを持つ。頸部は内傾し、口縁部は短く外湾する。頸部と胴部を刻目のない三角突帯で区切る。

E類：A～D類の頸部が内傾したのに対し、頸部はよりひきしまり、直立する。口縁部は外湾し、大きく開く。胴部と頸部の境に一条突帯を有す。

104 (Ea類) は胴部と頸部の境に刻目三角突帯を有す。また頸部と口縁部の境外面には沈線をめぐらす。胴部は欠損しているが、肩で大きく張る形状をしめす。120 (Ea類) も頸部と胴部の境に三角突帯があるが、刻目はない。

135、101 (Eb類) は口縁部は大きく朝顔状に外湾し、口縁部内に貝殻押圧による文様を施す。101の頸部付けねの突帯は断面M字状を呈す。

また、58は口縁部がないが、やはりE類に属すもので、頸部付けね外面に刻目三角突帯を有す他、内面の頸部付けねにも刻目のない三角突帯をめぐらす。

F類：102一点である。101同様大型の壺で、頸部から口縁部は大きく外湾し、頸部付け根に断面M字突帯を有す。口縁端部は肥厚し、内面に段を持つ。三条の沈線により口縁部内面の肥厚帯とその下に二重の文様帯をもち、貝殻押圧による鋸歯文がめぐり、また頸部には六条の沈線がめぐり、装飾性に富んだ造りである。

壺は口縁部の形態により、I～IV類に分類した。

I類：口縁部が如意状、およびそれに近い形状を有するもので、突帯のないもの。

Ia類 (9、25) は胴部が丸く内湾し、頸部で一度引き締まったのち、稜を持たず外湾する。くびれ部直下に沈線をめぐらす。

Ib類はやや内湾する胴部をもち、口縁部は短く外湾する (22、62、89、96)。最大径は胴部にある。96にはくびれ部直下に四条の沈線がめぐり、

Ic類はいわゆる如意状口縁の壺で、口縁部は稜をもたず短く外湾する。胴部は口縁部直下でほぼ直立する。甕I類の中心をなす。くびれ部直下に沈線をもつものも多く (109、131、137)、40、122、123はそのやや小型のタイプで、器壁が厚めである。39は二条沈線の間に竹管文をめぐらす。また口唇部に刻目をもつものも多い。

Id類は胴部は直立し、口縁部は弱い稜を持ち屈曲する。16、34、95がその代表例であるが、なかでも34は明確な稜をもつ。沈線をもつものはあるが (16、34、148)、口縁部に刻目は持たない。

Ie類は胴部は直立し、口縁部はより屈曲して、逆「L」字状に近くなる。しかし、明確な稜はもたない (66、107)。

II類：口縁部が直立、または内傾、外傾するが、屈曲しないもので、突帯を有すもの。いわゆる下城式の範疇に属するが、端部が四角く整形されているものと、舌状のものがある。

60は典型的な下城式で、胴部はわずかにまるみをおびてまっすぐたちあがる。口縁端部はカットし、四角く整形しており、口縁部直下に一条の刻目突帯を持つ。口唇部にも刻目が認められる。15、21にも小片であるが同様の形態が認められる。内湾する92、144、直線的にのびるが、外傾する129、130もこのタイプである。

Ⅲ類；Ⅰ類とⅡ類の両方の特徴をもつもので、口縁部は如意状もしくはそれに近い形に屈曲し、突帯を有す。

Ⅲa類は胴部上位で直立し、口縁部のみ短く外反する。口縁端部は舌状である。突帯はほとんどが刻目をもたない。唯一全形のわかる46は、突帯に刻目を持ち、一条沈線をめぐらせている。37は刻目のない二条の突帯を持つ。93もこのタイプに入ると思われるが、浅く、鉢状を呈する。

Ⅲb類は胴部がわずかにふくらみ、口縁部は短く外湾する。端部は四角く、整形されている。くびれ部に刻目のない三角突帯を有す。2、139が該当する。

Ⅲc類 (26、41、49) は胴部がやや膨らみ、口縁部は外湾する。くびれ部に一条突帯がつく。

Ⅰa類に突帯がついた形で、Ⅲb類よりも口縁部は長くのびる。突帯には刻目がつき、26と41は口唇部にも刻目が付く。

Ⅳ類；口縁部がいわゆる亀の中タイプの土器である。

Ⅳa類は80の一点のみである。胴部はやや膨らみをもち、口縁部直下でわずかにひきしまり、短く直立する。端部は上面に平坦面を持ち、内側に少しと外側に肥厚する。口縁部直下の三角突帯と口唇部に刻目が施される。

Ⅳb類は口縁端部外側に粘土紐を巻き付け、断面三角形に肥厚させたもので、胴部は口縁部下で直立する。8、36、67、94が該当する。36、94には刻目がつく。沈線はない。

Ⅳc類は54一点のみである。胴部は口縁部下でわずかに膨らみ、口縁部は外側に粘土紐をはりつけ、上面を平坦にすることによって、断面「T」字状に近い形態になっている。口縁部下には五条の沈線がめぐる。

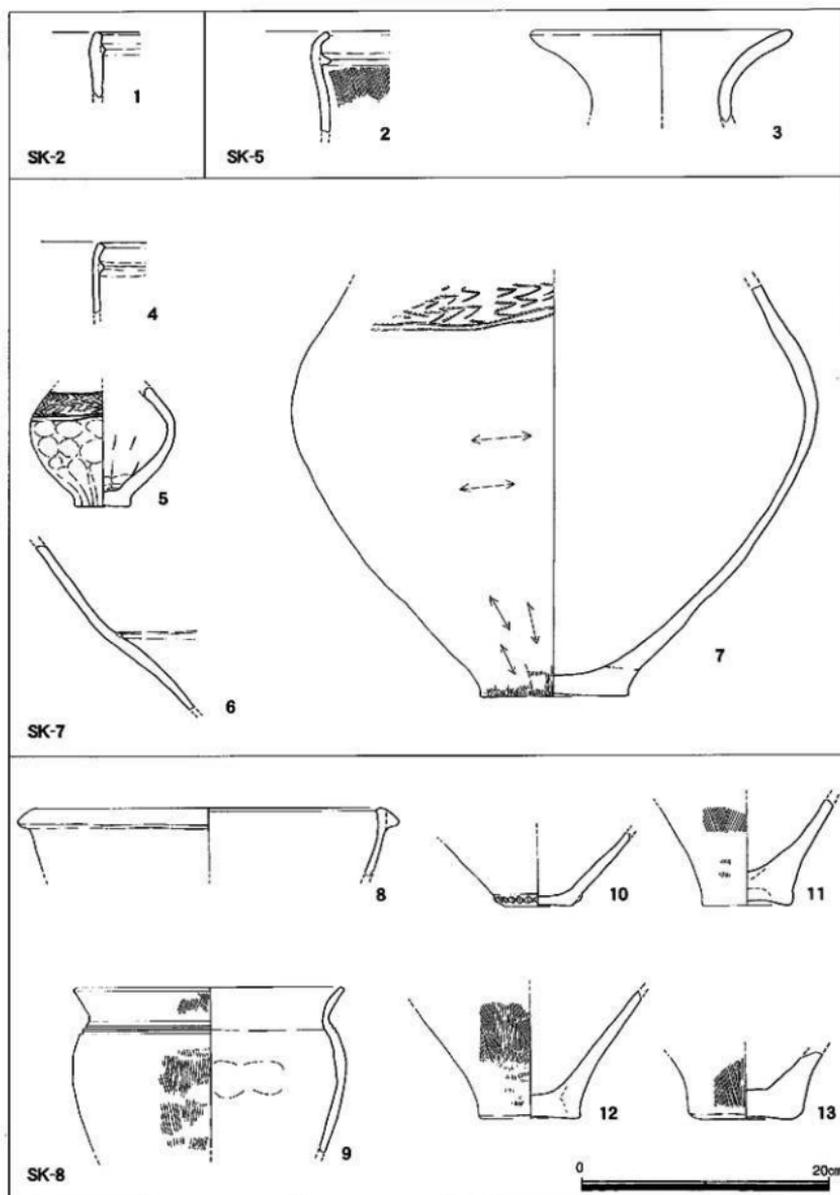


图18 出土土器实测图 (S=1/4)

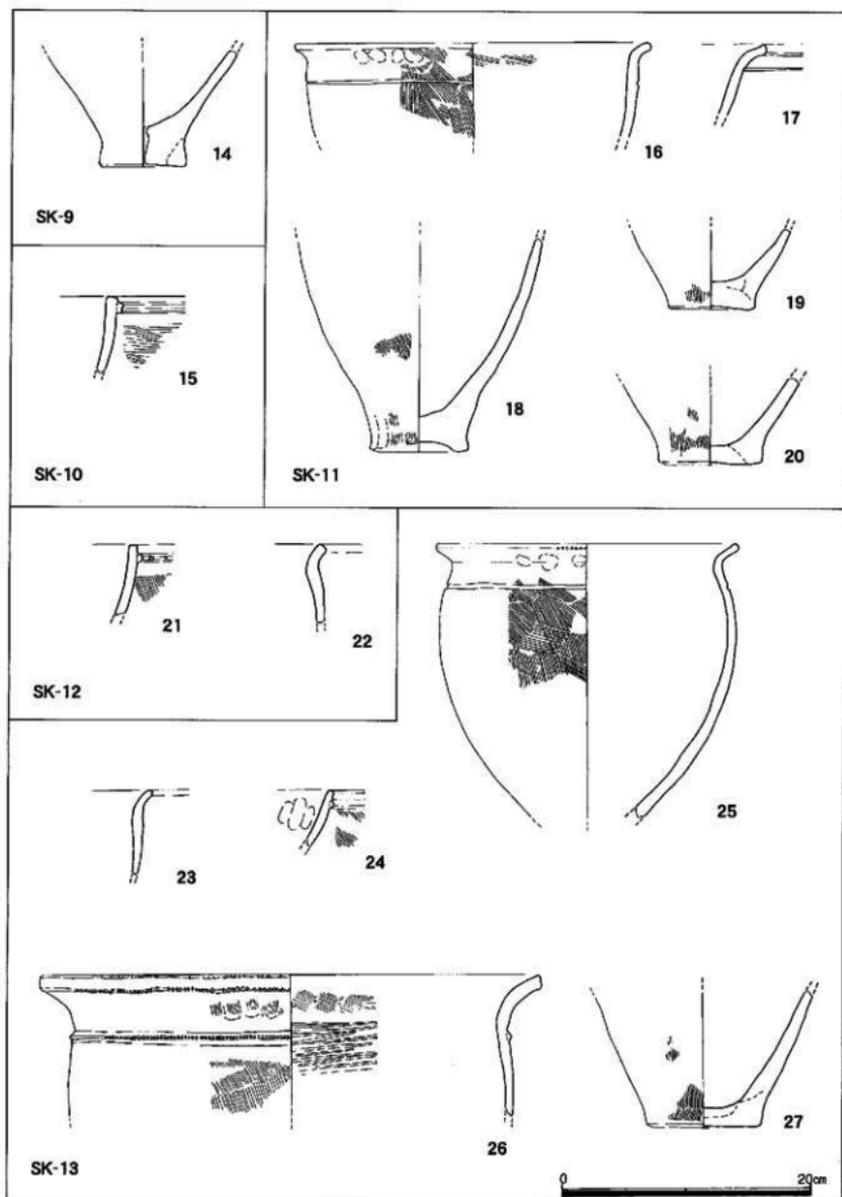


图19 出土土器实测图 (S=1/4)

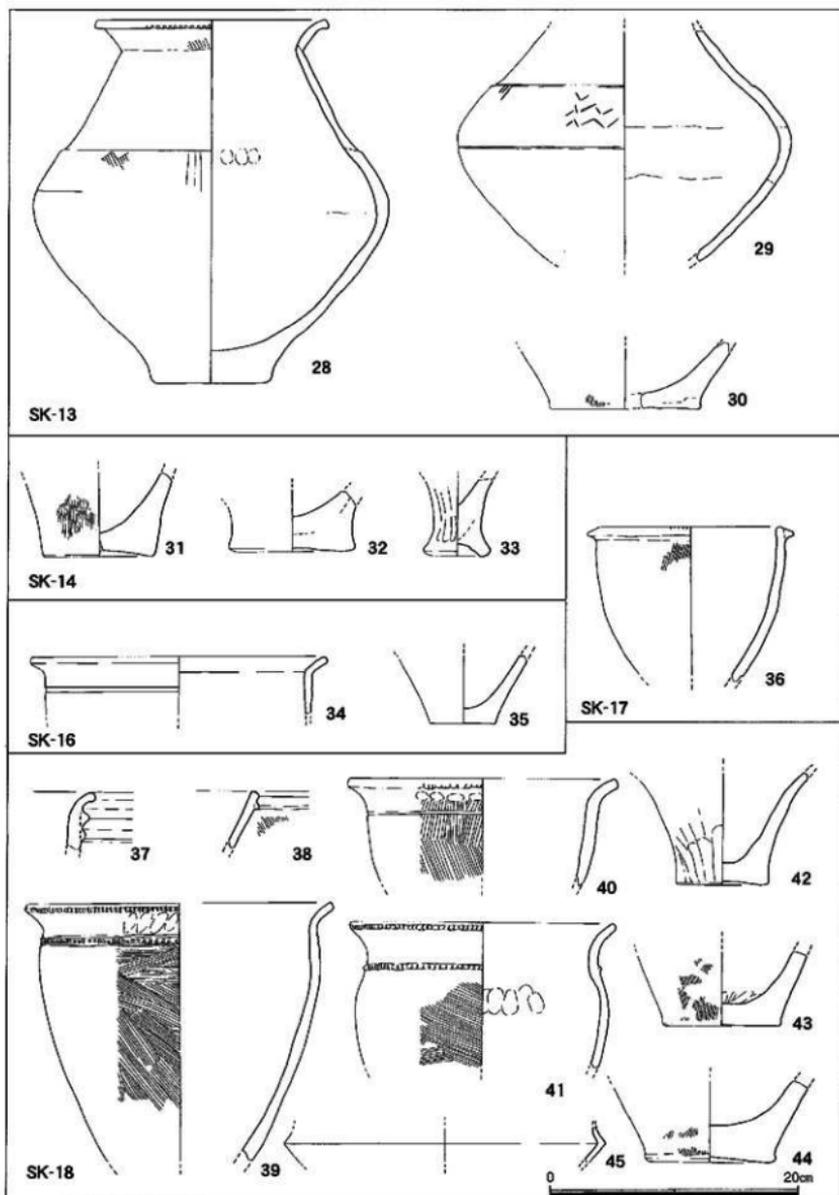


图20 出土土器实测图 (S=1/4)

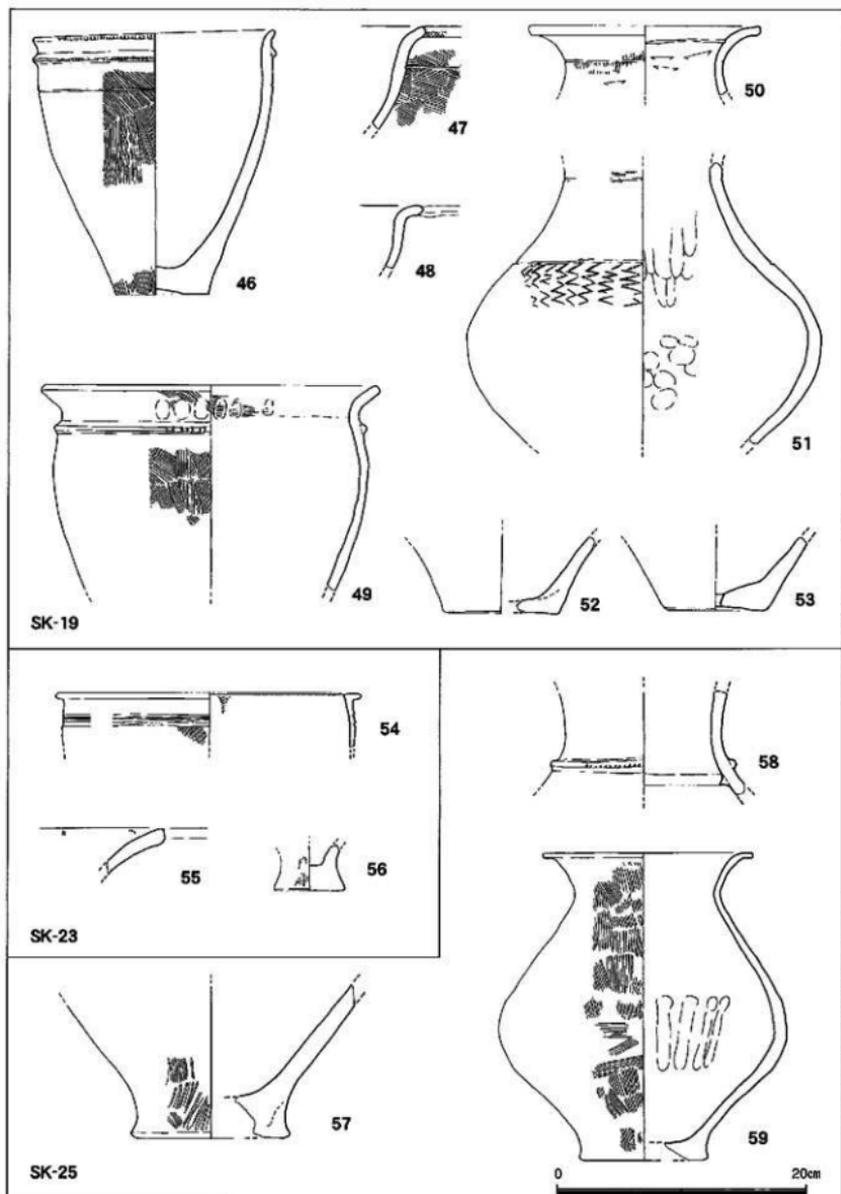


图21 出土土器实测图 (S=1/4)

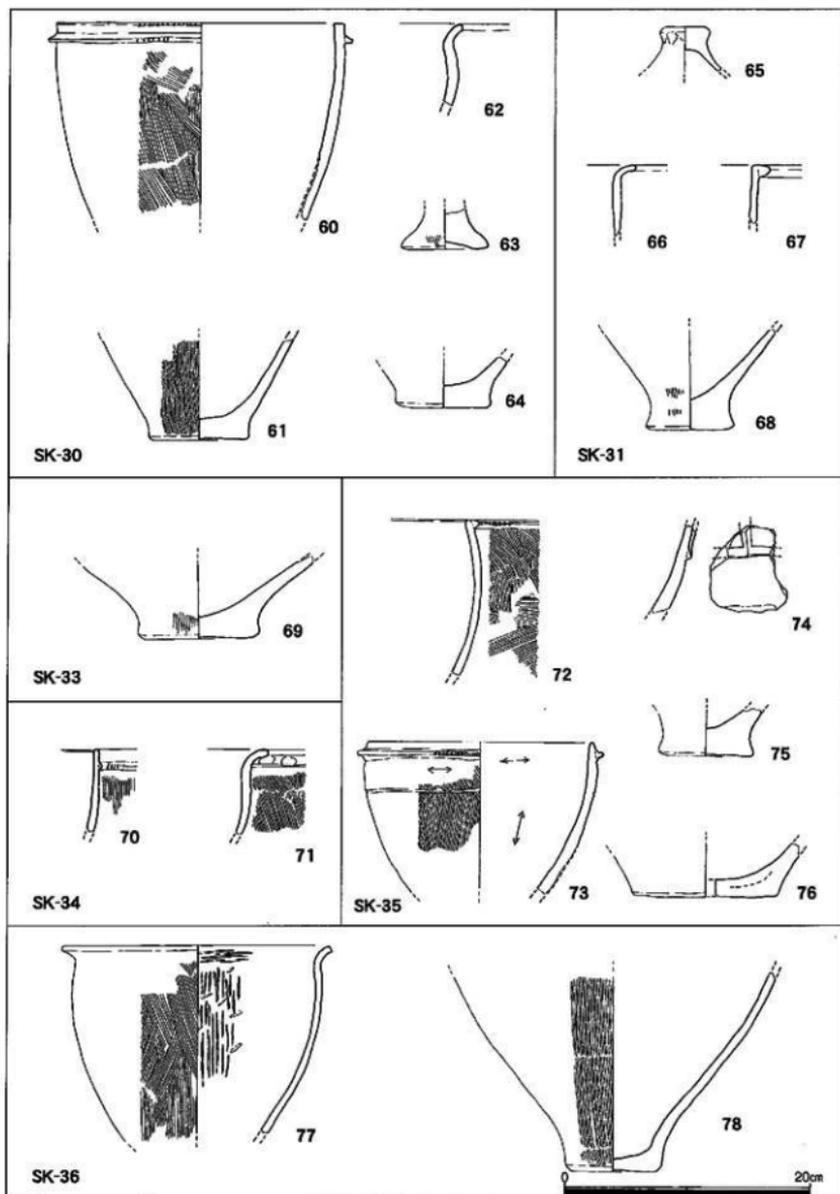


图22 出土土器实测图 (S=1/4)

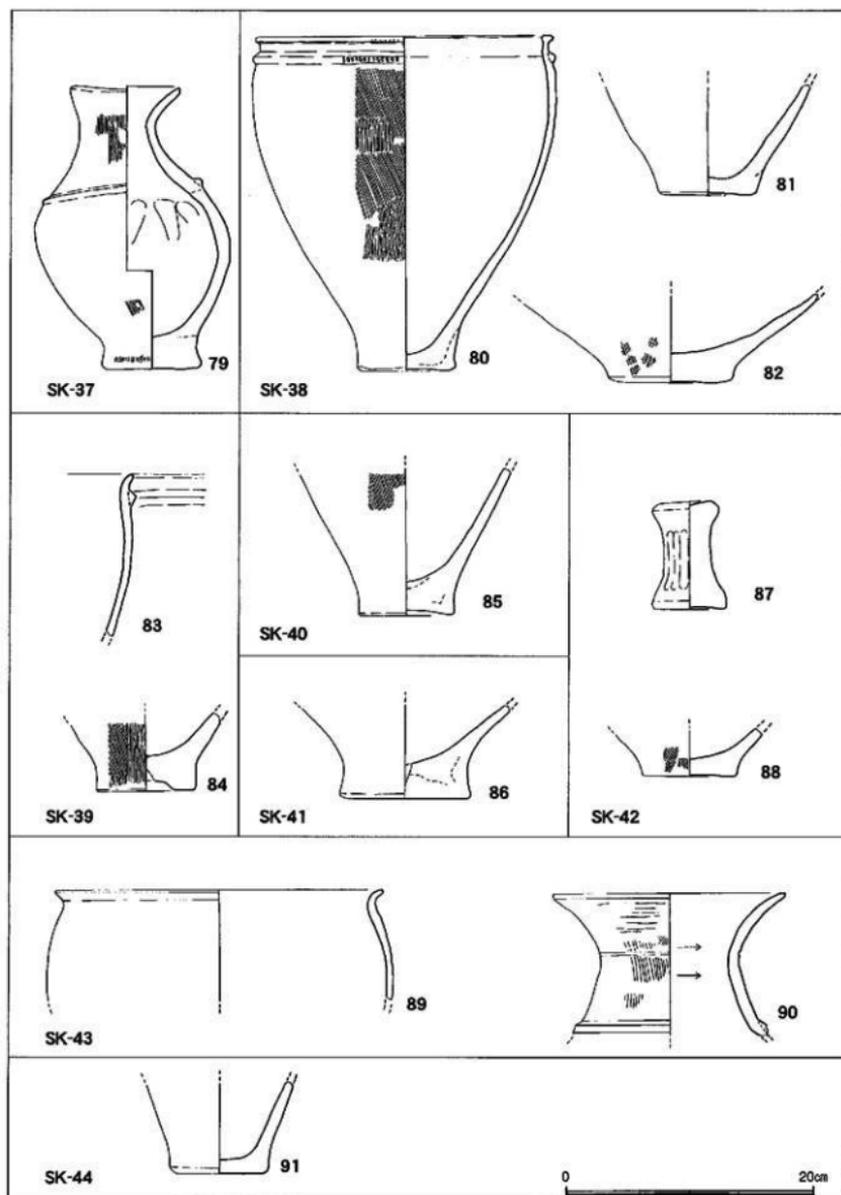


图23 出土土器实测图 (S=1/4)

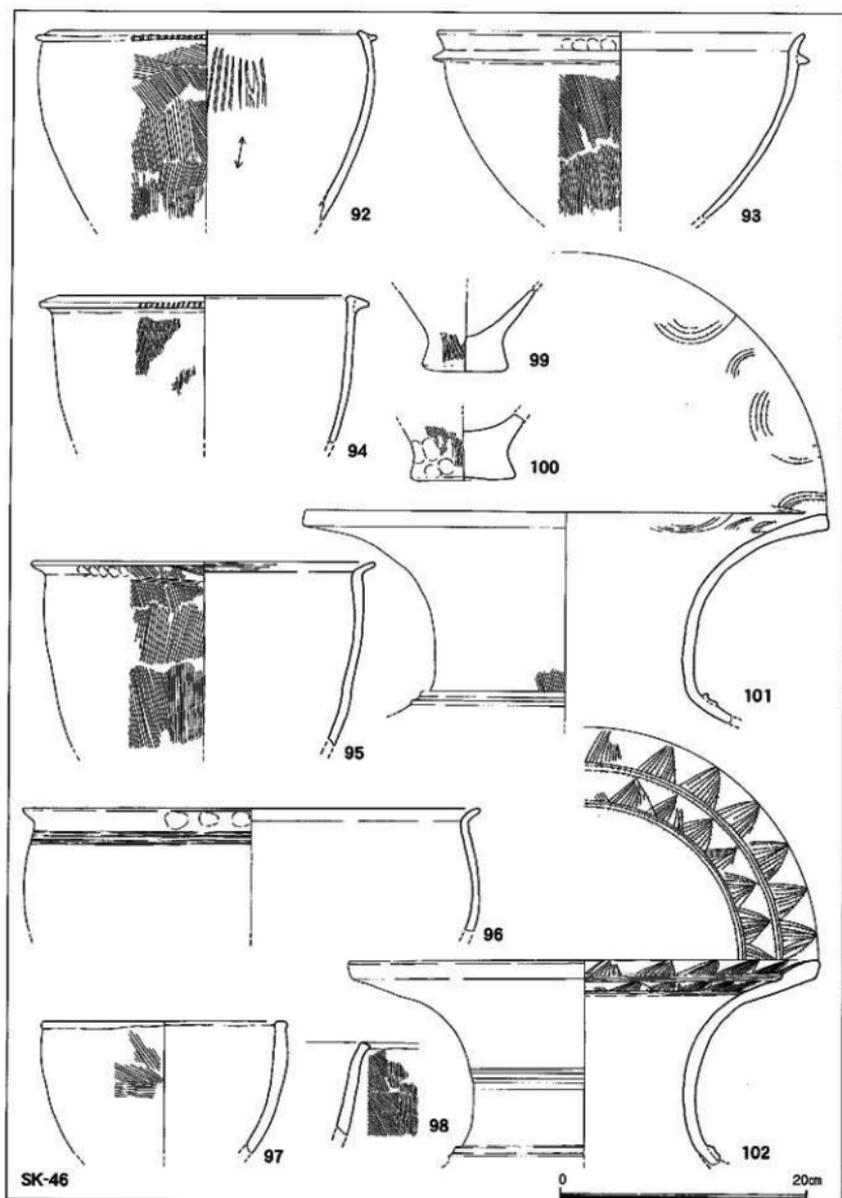


图24 出土土器实测图 (S=1/4)

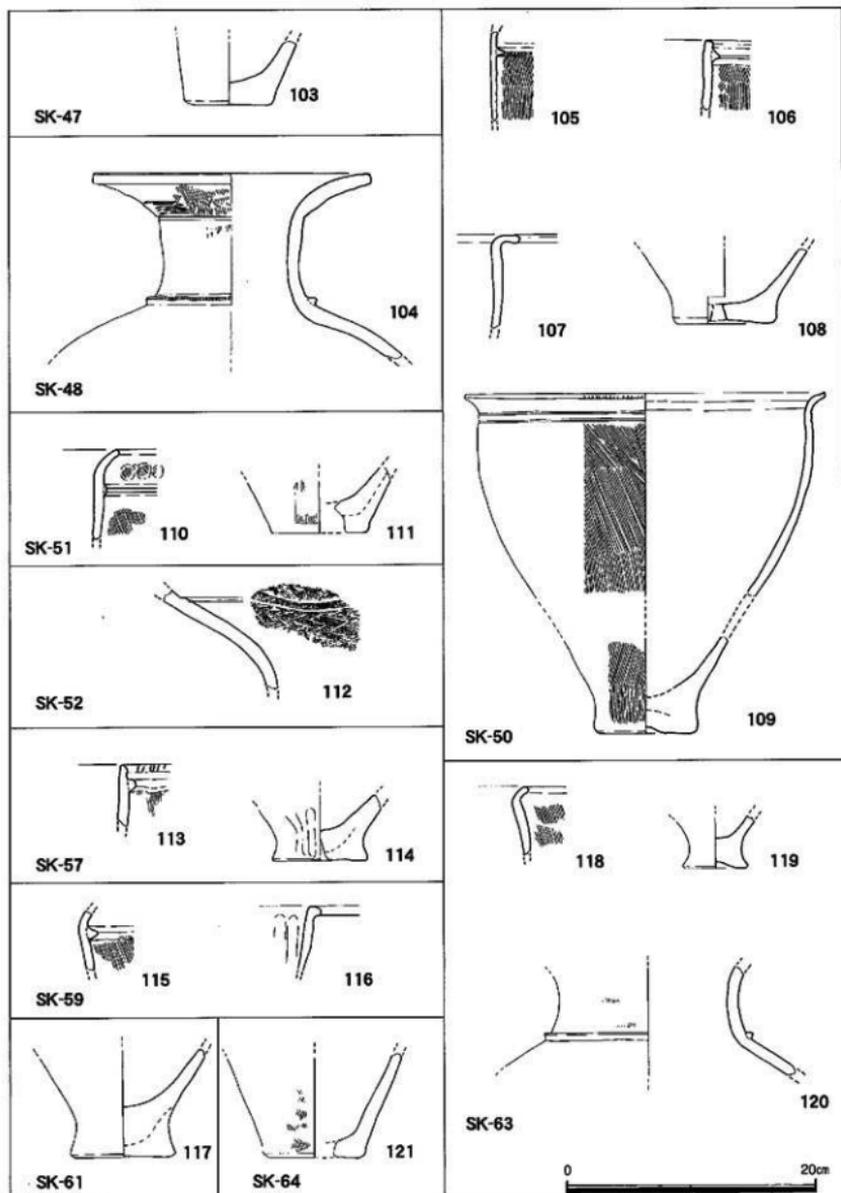


图25 出土土器实测图 (S=1/4)

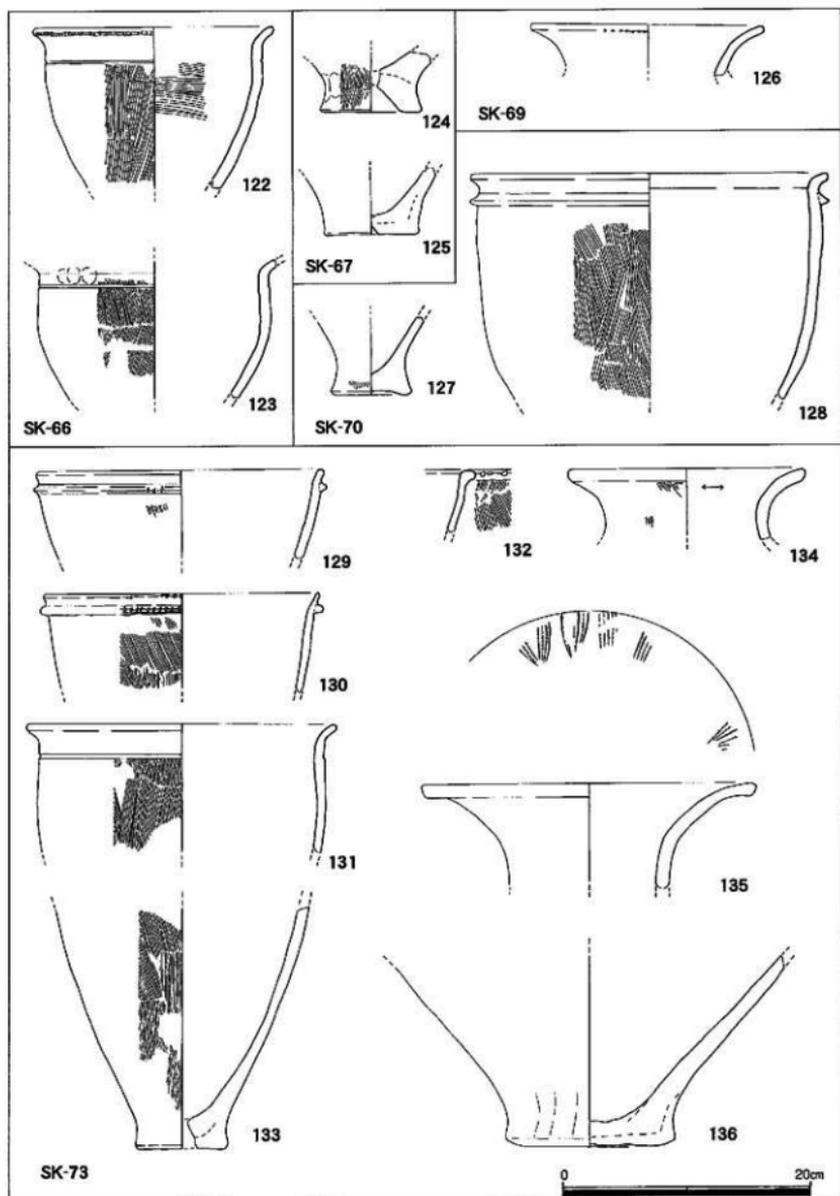


图26 出土土器实测图 (S=1/4)

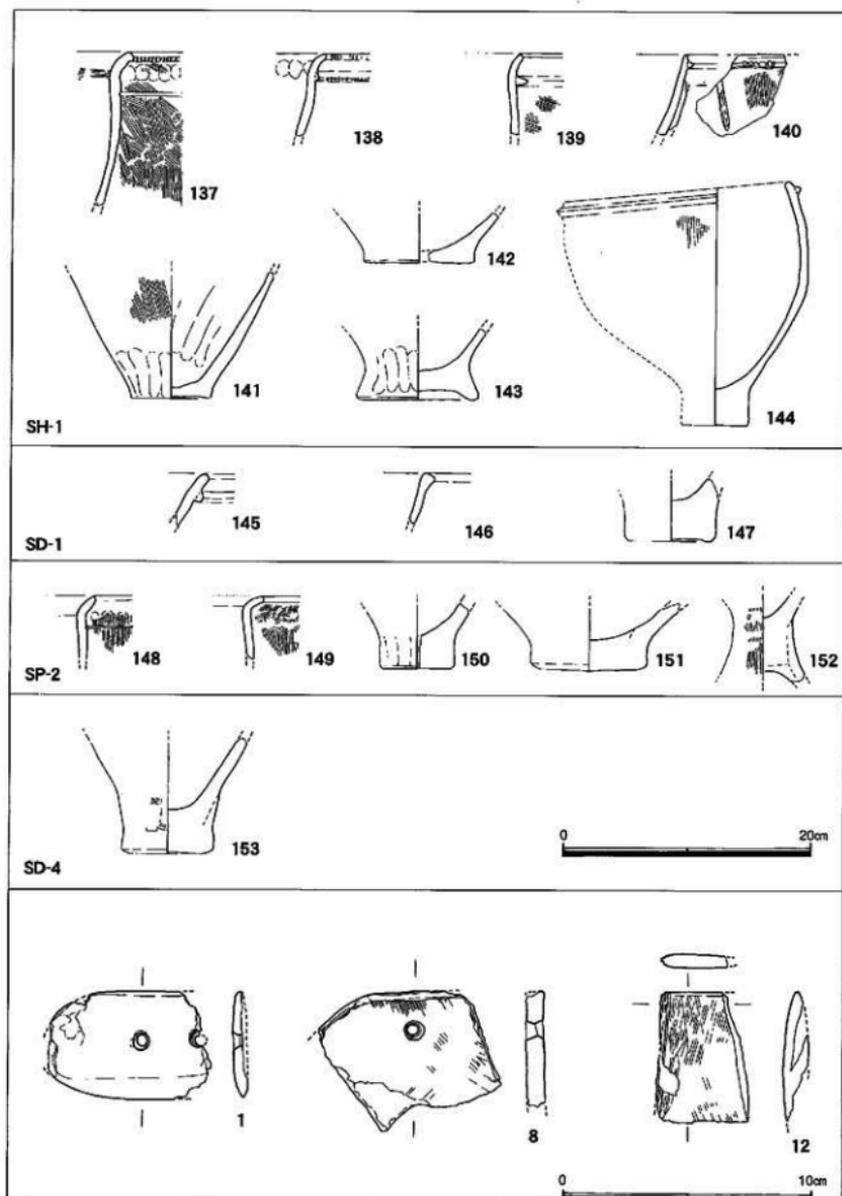


图27 出土土器 (S=1/4) 石器 (S=1/2) 实测图

表4 土器観察表

単位cm ( )の数値は復元値

胎土…◎非常に多い ○多い △少ない

遺物No.	遺物種別	口径	底径	器高	胴部	色	調	焼成	胎土	観	種	調整及び特徴	
1	2 甕					赤褐色	不良	○	◎	◎	◎	調整不明瞭。一条突帯	
2	5 甕					淡褐色	良好	△	◎	◎	◎	外。タテハケ目。一条突帯。口唇と突帯に刻目?	
3	5 甕 (21.0)					淡褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。口縁部が大きく外湾	
4	7 甕					褐色	良好	◎	◎	◎	◎	外。一条刻目突帯。タテハケ目	
5	7 甕		4.5		11.5	暗茶褐色	良好	◎	◎	◎	◎	内。ヘラによる押圧。外。貝殻羽状文。指押さえ 平底	
6	7 甕					橙褐色	不良	○	○	◎	◎	調整不明瞭。頸部付け根に一条突帯	
7	7 甕		(12.2)		(42.4)	橙褐色	良好	△	◎	◎	◎	外。ヨコヘラミガキ。貝殻の羽状文と二条沈線。 平底	
8	8 甕 (30.8)					淡褐色	PP積	◎	△	◎	◎	調整不明瞭。口縁部断面三角に肥厚	
9	8 甕 (21.8)				(22.0)	橙褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。不明瞭。二条沈線	
10	8 鉢 (7.0)					丸黒褐色 丸淡褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	外。ナデ。平底。底部周辺に押圧による刻目突帯	
11	8 甕 (7.4)					赤褐色	PP積	○	◎	◎	◎	外。タテハケ目。やや上げ底	
12	8 甕		8.0			淡褐色	良好	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。やや上げ底	
13	8 甕		9.2			淡黄褐色	良好	△	◎	◎	◎	外。タテハケ目。やや上げ底	
14	9 甕		7.0			赤褐色	良好	△	◎	◎	◎	調整不明瞭。やや上げ底	
15	10 甕					淡橙褐色	PP積	◎	◎	△	◎	◎	外。ヨコハケ目。口縁部一条突帯
16	11 甕 (29.0)				(27.0)	淡褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	◎	外。タテナメハケ目。一条沈線。口縁部指押 さえ
17	11 甕					淡褐色	良好	△	◎	◎	◎	◎	外。ヨコナデ。一条沈線
18	11 甕		(8.0)			橙褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。上げ底
19	11 甕		(7.0)			淡橙褐色	良好	◎	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。やや上げ底
20	11 鉢 (8.4)					橙褐色	PP積	△	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。平底
21	12 甕					淡黄褐色	PP積	△	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。一条刻目突帯
22	12 甕					淡黄褐色	PP積	△	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。口縁部少しくびれる
23	13 甕					淡橙褐色	PP積	△	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。
24	13 甕					橙褐色	PP積	△	◎	◎	◎	◎	外。ナメハケ目。調整不明瞭。一条突帯
25	13 甕 (24.4)				(23.8)	赤褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	◎	外。タテナメハケ目。一条沈線。口唇部刻目
26	13 甕 (44.0)					橙褐色	良好	△	◎	◎	◎	◎	内。ヨコハケ目→ヨコヘラミガキ。外。口唇部 と一条突帯に刻目。タテナメハケ目。外面全 面ス付着
27	13 甕		(9.3)			茶褐色	良好	◎	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。平底
28	13 甕 (19.0)		(4.8)	(29.2)	(28.8)	橙褐色	良好	◎	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。口縁部短く外反。頸部内傾。肩部削 り出し有段。平底。内。輪づみ痕アリ。外。頸部 ハケ目残存。口唇部刻目。胴部ヘラ直線文
29	13 甕				(27.0)	橙褐色	PP積	○	◎	◎	◎	◎	頸部内傾。肩部削り出し有段。調整不明瞭。内。 輪づみ痕アリ。外。ヘラによる沈線と羽状文
30	13 甕		(12.2)			赤褐色	良好	△	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。平底
31	14 甕		(9.0)			橙褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	◎	外。タテハケ目。やや上げ底
32	14 甕		(10.0)			淡褐色	良好	◎	◎	◎	△	◎	内外面ナデ。やや上げ底
33	14 甕		(5.4)			淡褐色	良好	◎	◎	◎	◎	◎	外。丁寧なナデ。上げ底
34	16 甕 (24.0)					淡黄褐色	PP積	◎	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。一条沈線
35	16 甕		(5.4)			赤褐色	不良	△	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。平底
36	17 甕 (16.7)				(15.2)	淡赤褐色	不良	△	◎	◎	◎	◎	調整不明瞭。口縁部断面三角形口唇部刻目?
37	18 甕					暗茶褐色	良好	△	◎	◎	◎	◎	二条突帯

遺物No.	遺物種別	口径	底径	器高	胴部	色	調	焼成	胎土	調整及び特徴
S	K							状況	観察	
38	18 壺					橙褐色		不良	○ ◎ ◎	外、ナナメハケ目、一条突帯
39	18 壺 (24.8)				(22.5)	橙褐色		良好	△ ○ ◎	外、ヨコナメハケ目、二条沈線の間に竹管文、口唇部刻目
40	18 壺 (21.6)				(18.0)	暗黒赤色		良好	○ ◎ ◎	外、タテハケ目、口唇部刻目、一条沈線
41	18 壺 (21.5)				(20.4)	黄褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、ナナメハケ目、口唇部と一条突帯に刻目
42	18 壺 (7.5)					暗褐色		良好	○ ◎ ◎	内、ヨコミガキ?、やや上げ底。外、底部付近タテナデ。
43	18 壺 (9.5)					橙褐色		良好	○ ◎ △	外、タテハケ目、平底
44	18 壺 (10.5)					赤褐色		良好	△ ○ ◎	外、タテハケ目、やや上げ底
45	18 鉢				(26.0)	橙褐色		良好	○	内、外面ヨコナデ
46	19 壺 (19.5)	7.5	21.5		(17.8)	赤褐色		良好	○ ○ ○	外、タテナメハケ目、口唇部と一条突帯に刻目、一条沈線、やや上げ底
47	19 壺					赤褐色		良好	○ ◎ ◎	外、ヨコナメハケ目、一条沈線、口唇部刻目、外面スス付着
48	19 壺					赤褐色		良好	○ ○	内外面ナデ、口縁部強く屈曲
49	19 壺 (27.2)				(25.3)				○ ○ ○	外、タテナメハケ目、一条刻目突帯
50	19 壺 (18.8)					赤褐色		良好	△ ◎ ◎	内外面ヨコミガキ、外面タテハケ目、口縁部屈曲部に内外面とも一条沈線
51	19 壺				(28.5)	赤褐色		良好	○ ◎ ○	外、頸部ヨコヘラミガキ?、口縁部屈曲部に一条沈線、頸部と胴部の境に一条沈線、貝殻の羽状文
52	19 壺 (9.6)					赤褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、平底
53	19 壺 (8.2)					橙褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、底部に穿孔アリ、やや上げ底
54	23 壺 (24.7)					淡黄褐色	良好	◎ △ ◎	◎ ◎ ◎	口縁平坦。外、タテハケ目、三条沈線、スス付着
55	23 壺					淡褐色	PP積	△ ○ ○	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、口縁部大きく外反、口縁内、貝殻押圧の文様僅かに残存
56	23 壺 (5.7)					赤褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目、平底
57	25 壺 (12.8)					暗橙褐色	良好	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	内外面丁厚ナデ、外面タテヘラミガキ
58	25 壺					暗橙褐色	良好	△ ◎ ○	◎ ◎ ◎	頸部つけ根一条刻目突帯、頸部内面ヨコヘラミガキ、内部にも一条突帯
59	25 壺 (17.0)	(10.5)	(24.8)	(23.3)		橙褐色	良好	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテ、ナナメハケ目、外面スス付着、平底
60	30 壺 (23.5)				(23.5)	淡褐色	良好	○ ○ ○	◎ ◎ ◎	外、タテ、ナナメハケ目、一条刻目突帯口唇部刻目
61	30 壺 (8.0)					明赤褐色	良好	△ ○ ○	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目、平底
62	30 壺					淡褐色	良好	△ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭
63	30 壺 (7.0)					橙褐色	良好	○ ◎ △	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目、上げ底
64	30 壺 (7.8)					淡黄褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、平底
65	31 壺 (4.0)					淡橙褐色	PP積	△ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭
66	31 壺					橙褐色	PP積	△ ○ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、口縁部強く屈曲
67	31 壺					淡黄褐色	不良	△ ○ ○	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、口縁部平坦、外に丸く肥厚する
68	31 壺 (7.0)					淡赤褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	調整不明瞭、外、タテハケ目、平底
69	33 壺 (9.8)					淡褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目、平底、不明瞭
70	34 壺					橙褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目、一条刻目突帯
71	34 壺					淡赤褐色	良好	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテナメハケ目、一条沈線
72	35 壺					淡黄褐色	PP積	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテ、ヨコハケ目、口縁部断面三角形に肥厚し刻目アリ

遺物 No.	遺物 SK	口径	底径	器高	胴部	色調	焼成	胎土	調整及び特徴
73	35 壺	(18.3)				橙褐色	良好	◎◎○	内、タテヨコ方向ヘラミガキ、外、タテハケ目 後上部ヨコヘラミガキ、一条刻目突帯一条沈線
74	35 壺					赤褐色	PP積	◎◎◎	調整不明瞭、タテヨコに突帯アリ
75	35 壺		7.6			赤褐色	良好	△◎○	内外面、丁寧ナデ、平底
76	35 壺		(11.4)			淡赤褐色	良好	△○◎	内外面にて、平底
77	36 壺	21.9			20.2	淡赤褐色	良好	○◎○	内、口縁部ヨコミガキ、胴部ハケ状工具痕、タ テミガキ、外、タテナメハケ目、スス付箱 外、タテハケ目、平底
78	36 壺		7.6			赤褐色	良好	○◎◎	外、タテハケ目、平底
79	37 壺	(8.8)	8.0	22.9	15.5	橙褐色	良好	○◎○	内外面調整不明瞭、外、タテハケ目、肩部一条突 帯、平底、ひずみ大
80	38 壺	(23.8)	(8.0)	(27.1)	(24.5)	橙褐色	PP積	◎◎◎	口縁部肥やし平坦、外、タテハケ目、一条刻目突 帯、口唇部刻目、平底
81	38 壺		(8.0)			赤褐色	PP積	○◎◎	内外面ナデ、やや上げ底
82	38 壺		(10.1)			赤褐色	良	△◎◎	内外面調整不明瞭、平底、外タテハケ目
83	39 壺					淡黄褐色	不良	○◎◎	調整不明瞭、一条突帯
84	39 壺		(8.0)			橙褐色	良好	○◎◎	外、タテハケ目、上げ底
85	40 壺		(7.8)			赤褐色	PP積	○◎◎	調整不明瞭、内底部スス付箱、外タテハケ目、 やや上げ底
86	41 壺		(10.4)			淡黄褐色	PP積	◎◎◎	調整不明瞭、平底
87	42 器台	5.4	6.0	8.7	3.8	橙褐色	良好	◎◎◎	調整不明瞭、外タテナデ
88	42 壺		(7.0)			淡橙褐色	良好	◎◎◎	外、タテハケ目、平底
89	43 壺	(26.4)			(28.0)	暗赤褐色	PP積	○◎◎	調整不明瞭
90	43 壺	(18.8)				橙褐色	良好	◎○◎	外、タテハケ目、口縁部ハケの板状圧痕多数、頸 部一条沈線、肩部突帯
91	44 壺		(7.8)			橙褐色	PP積	○◎○	調整不明瞭、平底
92	46 壺	(27.4)			(27.0)	黄褐色	良好	◎◎○	内、タテヘラミガキ、外、一条の刻目突帯、外、 タテナメハケ目、内溝
93	46 壺	(29.8)			(28.6)	赤褐色	PP積	◎◎◎	外、タテナメハケ目、一条突帯
94	46 壺	(26.5)			(24.2)	淡橙褐色	PP積	△○◎	調整不明瞭、外タテハケ目、口縁部に一条の刻 目突帯をはり、肥厚させる
95	46 壺	(27.7)			(25.8)	淡赤褐色	良好	○◎○	内、口縁部ヨコハケ目、口縁部が陵をもって屈 曲する、外タテハケ目
96	46 壺	(37.0)			(37.0)	黄褐色	PP積	◎◎◎	調整不明瞭、外四条沈線
97	46 鉢	(19.8)			(19.8)	赤褐色	PP積	△◎◎	口縁部平坦、外調整不明瞭、ヨコナメハケ目
98	46 鉢					淡赤褐色	良好	○◎△	外、タテナメハケ目、口縁部外スス付箱
99	46 壺		(7.0)			赤褐色	PP積	○◎○	外、タテハケ目、平底
100	46 壺		(8.6)			淡褐色	良好	◎◎△	外、タテハケ目、やや上げ底
101	46 壺	(42.2)				橙褐色	PP積	△◎◎	外、タテハケ目、口縁部大きく外溝、口縁部内員 数重弧文、頸部つけ根M字突帯
102	46 壺	(38.0)				橙褐色	良好	◎◎○	口縁部大きく外溝、口縁部肥厚、貝殻の鋸歯 文と三条沈線が、口縁部内の肥厚帯とその下に 2段アリ、頸部六条沈線、頸部つけ根M字突帯
103	47 壺		(7.3)			赤褐色	PP積	○◎◎	不明瞭、平底
104	48 壺	(22.5)				暗橙褐色	良好	△○◎	内、丁寧ナデ、外、タテハケ目、口縁部ヨコヘ ラミガキ、口縁部つけ根、一条沈線、頸部つけ根 に一条刻目突帯
105	50 壺					褐色	良好	△○○	外、タテハケ目、一条突帯

遺物 No.	遺構 S K	器種	口径	底径	器高	胴部	色調	焼成	胎土 能 練 晒	調整及び特徴
106	50	甕					褐色	良好	△ ◎	外、タテハケ目。一条刻目突帯
107	50	甕					暗褐色	中良	△ ◎	調整不明瞭。口縁部強く屈曲
108	50	甕		(8.4)			赤褐色	良好	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。底部突孔。やや上げ底
109	50	甕		(8.4)			橙褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテナメハケ目。二条沈線。口縁部刻目。底部やや上げ底
110	51	甕					淡褐色	中良	◎ ◎ ◎	外、タテナメハケ目。一条突帯
111	51	甕		(7.5)			暗赤褐色	中良	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。平底
112	52	壺								内外丁寧なナデ。外、ヨコヘラミガキ?。肩部突帯を削り出す。ヘラ揃羽状文
113	57	甕					橙褐色	中良	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。口縁部刻目。一条突帯
114	57	甕		(7.6)			淡赤褐色	中良	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。平底
115	59	甕					淡褐色	良好	△ ◎	外、ナメハケ目。一条突帯
116	59	甕					淡褐色	中良	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。口縁部断面三角形に肥厚
117	61	甕		(8.4)			橙褐色	良好	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。平底
118	63	甕					橙褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。
119	63	甕		(5.2)			赤褐色	中良	◎ ◎ ◎	不明瞭。上げ底
120	63	壺					淡橙白色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。後ヨコ方向ヘラミガキ?。頸部つけ根に一条突帯。肩部具殼羽状文
121	64	甕		(8.3)			淡黄褐色	中良	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。平底
122	66	甕	(19.5)			(17.5)	淡褐色	良好	◎ ◎ ◎	内、ヨコハケ目。口唇部刻目。外、タテヨコハケ目。一条沈線
123	66	甕				(18.8)	暗赤褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。一条沈線
124	67	甕		(8.2)			淡褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。上げ底
125	67	甕		(7.6)			褐色	△ △ ◎	調整不明瞭。平底。底部突孔アリ	
126	69	壺	(18.9)				淡橙褐色	良好	◎ △ ◎	調整不明瞭。口唇部刻目
127	70	甕		(6.5)			暗赤褐色	中良	△ ◎ ◎	外、タテハケ目。やや上げ底。調整不明瞭
128	70	甕	(29.0)			(27.9)	暗茶褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテナメハケ目。一条突帯
129	73	甕	(23.3)			(22.8)	淡黄褐色	中良	△ ◎ ◎	調整不明瞭。一条刻目突帯
130	73	甕	(22.3)			(21.5)	赤褐色	中良	◎ ◎ ◎	外、タテハケ目。一条刻目突帯。口唇部刻目
131	73	甕	(25.1)			(23.5)	赤褐色	中良	△ ◎ ◎	調整不明瞭。外、タテハケ目。一条沈線
132	73	甕					淡赤褐色	中良	◎ ◎ ◎	外、ナメハケ目。口縁部刻目。肩部肥厚
133	73	甕		(7.4)			茶褐色	◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	外、タテナメハケ目。平底
134	73	壺	(19.2)				淡黄褐色	良好	◎ ◎ △	内外面ヨコ方向ヘラミガキ。外タテハケ目
135	73	壺	(27.2)				黄褐色	良好	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。口縁部大きく外流。口縁部内面貝殻歯文
136	73	壺		(13.7)			赤褐色	不良	△ ◎ ◎	調整不明瞭。平底

## S H

137	1	甕					橙褐色	良好	◎ ◎ ◎	内、ヨコハケ目。外、タテナメハケ目。口縁部刻目。一条沈線
138	1	甕					暗褐色	中良	◎ ◎ ◎	調整不明瞭。一条刻目突帯。口縁部刻目
139	1	甕					褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、ナメハケ目。一条突帯
140	1	甕					褐色	不良	△ ◎ ◎	口縁部一条刻目突帯。タテの突帯。タテハケ目
141	1	甕		(6.5)			赤褐色	良好	◎ ◎ ◎	外、タテナメハケ目。平底
142	1	壺		(9.6)			黄褐色	良好	△ ◎ ◎	調整不明瞭。平底
143	1	甕		(9.8)			淡黄褐色	良好	◎ ◎ ◎	内外面ナデ。上げ底
144	1	甕		5.5	(17.3 ~19.8)	(19.5)	淡黄褐色	不良	△ ◎ ◎	調整不明瞭。外、タテナメハケ目。一条突帯。肩部半球状にふくらむ。ひずみ大

遺物No.	遺物SD	器種	口径	底径	器高	胴部	色調	焼成	胎土	調整及び特徴
									胎土 胎土 胎土	
145	1	壺					橙褐色	中積	△ △ △	調整不明瞭。一条突帯
146	1	壺					橙褐色	中積	○ ◎ △	調整不明瞭。口縁部肥厚
147	1	壺		7.3			赤褐色	中積	△ △ ○	調整不明瞭。平底
148	2	壺					褐色	不良	◎ ◎ ◎	外。タテハケ目。一条沈線
149	2	壺					褐色	中積	○ ◎ ○	外。タテハケ目。口縁部。隈をもち外反
150	2	壺		(6.0)			赤褐色	中積	○ ◎ ○	調整不明瞭。外。タテハケ目?。平底。
151	2	壺		(9.4)			褐色	良好	○ ◎ ○	調整不明瞭。平底
152	2	壺					淡褐色	良好	○ ◎ ◎	外。タテハケ目。上げ底
153	4	壺		(7.5)			橙褐色	良好	○ ◎ ◎	調整不明瞭。外。タテハケ目。平底

表5. 石器観察表

NO	出土遺構	器種	石材	法 量				備 考
				長径 cm	短径 cm	厚さ cm	重量 g	
1	SK10	石包丁	緑泥片岩	6.6	4.4	0.5	21.8	欠損。片面剥離
2	SK11	すり石	風化した花崗岩	17.0	16.0	6.0	2830.0	両面使用
3	SK13	叩石	風化した花崗岩	7.2	7.0	6.3	418.0	
4	SK18	凹石	風化した花崗岩	10.0	8.0	3.8	506.0	両面使用
5	SK19	凹石	風化した花崗岩	9.5	7.0	4.2	440.0	両面すった痕跡あり
6	SK20	凹石	風化した花崗岩	10.9	8.8	5.5	854.0	半分欠損。両面
7	SK21	凹石	風化した花崗岩	12.9	11.0	4.5	1028.0	両面
8	SK20	石包丁	不明	7.3	5.6	0.8	44.1	欠損。表面剥離著しい
9	SK34	凹石	風化した花崗岩	11.7	10.6	8.2	1436.0	片面のみ使用
10	SK39	石皿?	風化した花崗岩	24.0	24.0	9.3	8160.0	両面
11	SK46	凹石	風化した花崗岩	19.4	18.6	6.2	3284.0	一部欠損。片面のみ
12	SK46	石ノミ?	頁岩	5.3	3.8	1.2	20.2	欠損
13	SK46	石包丁	頁岩	4.3	2.8	0.3	3.4	剥片
14	SK47	凹石	風化した花崗岩	10.2	9.4	3.8	606.0	両面
15	SK48	すり石	風化した花崗岩	22.2	16.0	10.2	4700.0	両面
16	SK60	凹石	風化した花崗岩	10.6	9.1	3.7	522.0	両面。一部欠損
17	SK60	礫石	頁岩	6.2	5.6	5.5	388.0	欠損
18	SK69	凹石	風化した花崗岩	9.6	8.9	4.5	642.0	両面
19	SK73	凹石	風化した花崗岩	11.5	11.0	4.5	1008.0	両面
20	SK73	凹石	風化した花崗岩	19.5	16.6	7.7	3714.0	両面使用
21	SK50	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.2	0.2	0.4	完形品
22	SK50	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.7	一部欠損
23	SK50	石鏃?	姫島産黒曜石	3.0	1.7	0.4	1.8	一部欠損
24	SH1	叩石	不明	8.9	8.8	3.0	362.0	欠損
25	SH1	石皿	風化した花崗岩	31.2	25.7	8.0	10900.0	両面
26	SD1	凹石	風化した花崗岩	18.3	10.0	5.8	1548.0	半欠。片面のみ使用
27	SD1	石鏃	サヌカイト	2.5	1.3	0.3	1.1	完形品
28	SD1	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.6	0.3	1.1	
29	SD1	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.0	0.3	0.6	

### 第三章 小 結

#### 1、遺物について

当遺跡出土土器は弥生時代前期後葉を中心とした、板付ⅡB式にほぼ平行する時期のもので、一部中期初頭に入る可能性を持つものを含む。遺構の依存状態の悪い中、SK-13,19,46などで、壺と甕との良好なセットを得ることができた。これらの遺構出土の土器を中心に、その年代、特徴を述べる。

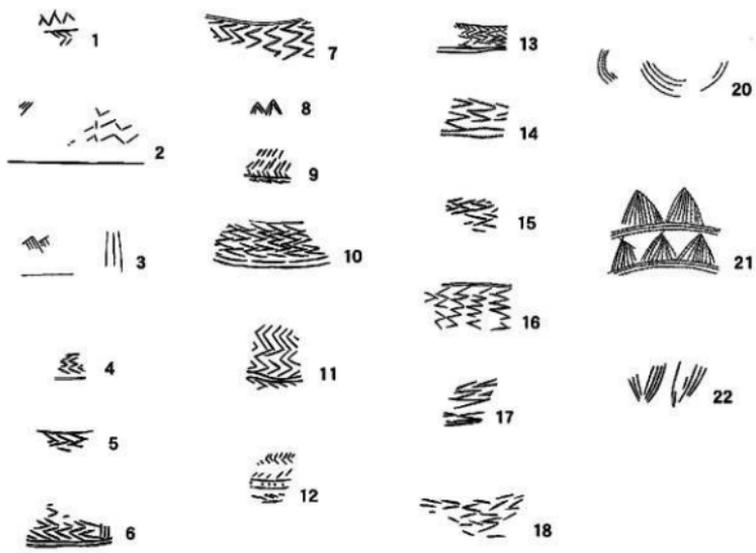
壺の中では、Aa類の28とBa類の29は、板付ⅡB式のなかでも古式の属性を持つ。続いてBb類の50,51、C類の90と、Bc類の5,7、Ea類104があるが、これらは形態的な特徴により若干の前後関係があげられるものの、同時存在しうる一群である。また、Ab類の59、Eb類の101、F類の102は前期末～中期初頭までさがりうる。器形は壺A類、B類など板付式の直接的な影響を及ぼすものの、貝殻押圧で施文したり、頸部内面に突帯を有すなど、関門、瀬戸内地方の影響を色濃く示す。

壺の施文部位は胴部上半分と、口縁部内にわかれる。全形のわかるものが少ないため、明言できないが、文様をもつものが主流と思われる。文様は胴部ではほとんどが羽状文で、口縁部内では重弧文や鋸歯文をえがく。施文具にはヘラと貝殻の二種があり、ほぼ同数である。壺の胴部では、ヘラを用いているもの、貝殻を用いているものがあるが、口縁部内では基本的に貝殻が用いられている。ただし、SK-46の壺101では、口縁部内に貝殻腹縁で重弧文を描いているが、一部分ヘラで描いた重弧文が確認された。当遺跡では木の葉文は未確認である。中津市内の福島遺跡東入垣地区で中期初頭と思われる壺の小片に木の葉文を2点確認している。

次に、甕の形態別の割合を図28に示した。集計の対象は図が示していない土器も含めて、分類可能なものに限った。ゆえに底部のみものは除外した。分類可能な甕96点の内、Ⅰ類が45%、Ⅱ類が21%、Ⅲ類が23%、Ⅳ類が11%であった。

Ⅰ類甕は板付系の甕の系譜をひくものであるが、沈線をもつものが非常に多い。如意状口縁の甕Ⅰc類は、約85%が沈線を有す。突帯を持つⅡ類の中にも沈線を有すものが存在する。

豊後地方ではこの時期の甕は下城式がその大半を占めることが知られている。高橋徹氏は、「大分県史先史編」の中で、下城式土器をa（口縁部が直線で複雑な屈曲を示さないもの）、b（口縁部がゆるやかに外湾するもの）、c（口縁部下位で内傾し、端部に向かって再び短く外傾する）の三種類にわけ、「b、c類が主として県北に分布し、大分平野ではa類が盛行する」と述べている。aは当遺跡の甕Ⅱ類、bはⅢa類、cはⅢb類に相当する。甕Ⅱ類の60は典型的な下城式と周知されるものであるが、当遺跡での甕Ⅱ類の存在は弱い。数の上では、Ⅰc類に続く21%をしめるが、口径復元も不可能な小片が多い。また突帯に刻目を持たないものの割合が多く、半数以上をしめる。Ⅲb類では全て刻目がなく、Ⅱ類でさえ約半分は刻目をもたない。いわゆる下城式甕のスタイルはここでは大きくくずれている。当遺跡と平行期である安心院町宮ノ原遺跡Ⅰ期では甕Ⅱ類が大半を占め、Ⅲa類、Ⅲb類、甕Ⅰ類はごくわずかである。宇佐市東上田遺跡でも甕Ⅱ類の存在がめだつ。しかし、宇佐市台ノ原遺跡では東上田遺跡に比して、板付系の割合が大きく、下城式ではⅢa、Ⅲb類も一定量を占める。同様に山国川の対岸、福岡県新吉富村中乗野遺跡でも、板付系の甕とともにⅢa、Ⅲb



No.	遺構	施文具		施文部位		分類	No.	遺構	施文具		施文部位		分類
		ヘラ	貝	胴	口縁				ヘラ	貝	胴	口縁	
1	SK-3	○		○			12	SD-1	○		○		
2	SK-13	○		○		Ba	13	SK-7		○	○		Bc
3	SK-13	○		○		Aa	14	SK-7		○	○		Bc
4	SK-13	○		○		B	15	SK-18		○	○		Bbかc
5	SK-17	○		○		Bbかc	16	SK-19		○	○		Bb
6	SK-18	○		○		Bbかc	17	SK-59		○	○		
7	SK-52	○		○		Aa, Ba	18	SK-63		○	○		Ea
8	SK-64	○		○		B	19	SK-23		○		○	Eb
9	SK-66	○		○		B	20	SK-46	○	○		○	E
10	SH-1	○		○		Bb	21	SK-46		○		○	F
11	SH-1	○		○		Bbかc	22	SK-73		○		○	Eb

表6 壺の文様

類の甕の存在が知られる。北部九州の、板付系甕の文化圏に近いほどいわゆる下城式甕との折衷様式の甕の比率が増大する。上ノ原平原遺跡でのⅡ類甕、Ⅲ類甕a,b,cの構成比は大分県と福岡県の県境としての位置を表現している。

また、Ⅲb類の口縁部をさらにのぼした甕Ⅲc類は、胴の張るⅠa類に突帯がついたもので、行橋市の下稗田遺跡Ⅱ式のなかで一定量をしめることが報告されている。下稗田遺跡では、実に甕の95%を如意状口縁が占め、突帯は、基本的に如意状口縁の甕につく。下稗田ⅠD壺である。これは上ノ原平原甕Ⅲc類とほぼ共通するものである。Ⅲc類は、SK-13において、Ⅰa類(25)とともに壺Aa類、Ba類と、SK-19ではⅢa類(46)とともに壺Bb類とセットをなす。口縁部が屈曲し突帯がつく甕Ⅲ類の割合は非常に大きく、如意状口縁甕を主体とする地域と突帯甕を主体とする地域の境界地域では、決して例外ではない。一定量の存在を持つ一群であり、折衷様式の甕として片づけるのではなく、ひとつの形式としてとらえるべきではないだろうか。

当遺跡のなかでもやや時期の下るグループにはいるものとして、SK-46で良好な一括資料が得られている。小さな円形堅穴に一括廃棄されたもので、多種類の遺物が小片に破砕され、詰め込まれていた。Fb類、F類の壺と共伴する甕は、亀の甲口縁の94、下城式でも退化形態と思われる92、93、素口縁の鉢であろう97、98である。前期末～中期初頭のセットとして、興味深い資料である。またⅠd類、Ⅰe類のように口縁部が強く屈曲する甕も前期末～中期初頭までさがりうる資料である。

以上のほかに、小片であるが縦の突帯を持つ甕を2点確認した。74と140である。おそらく「エ」字状になると思われる。140では口縁直下の突帯に刻目がつく。口径復元はできなかったが、胴部のまるみより小型の甕になると思われる。下稗田遺跡のⅡ式、上ノ原横穴墓、宮ノ原遺跡より類似の甕が報告されている。いずれも小型である。

## 2、遺構について

### (1) 土坑、堅穴遺構

以上、遺物では大きな時期差は認められないが、土坑、堅穴遺構に形態別の時期差はあるのだろうか。SK-13のみ他と違う遺構形態をもち、出土遺物も古相を呈すことから、若干早い時期におくことができよう。また、SK-19も古めの遺物をもち、SK-16はSK-27に切られており、総じて大型の円形遺構はやや古く設定できそうである。方形と小型円形では、新相を早す遺物が多く、大型円形遺構と並行もしくは若干下る時期に設定される。しかし、方形と小型円形の間に明確な時期差は確認できなかった。ほぼ同じ時期に同時存在しつつ作りなおされていたものであろう。

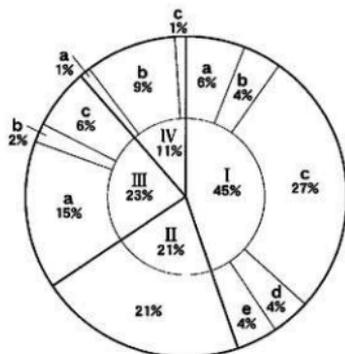


図28 甕分類別の割合

円形のSK-10,16,19,34は壁面が垂直から逆台形、フラスコ状であり、貯蔵穴と判断できる。SK-16,19では中心に一本の柱を建て、円錐状の屋根をふいていたことが想定できる。SK-13のみ周囲に推定8本の柱を持つ。さらに、ピットの底面はやや内傾しているため、8本の柱は内側にむいて立てられ、中央でひとつにしばり、やはり、円錐状の上屋をもっていたと想像される。しかし、床面はレンズ状で貯蔵用の器を置くのに適さないことから、器を用いず、素材のままかもしくは袋に入れて保存する施設であったと思われる。また方形のものでは、SK-2に柱穴が一本確認できるほかは、他には柱穴がない。大型方形遺構はSK-25以外はほとんど無遺物である。柱穴がないため、小さな作業場的なものの可能性は少ないのではないかと。同じく貯蔵穴と考えられるが、上屋が不明である。小型円形堅穴は土層断面に柱痕状のものは確認できず、壁面が垂直、又は逆台形で、ドングリも出上していることから、やはり貯蔵穴と考える。簡単な乗せるだけの蓋をかぶせていたのであろう。

## (2) 遺構の先後関係

住居跡、溝、溝状堅穴、堅穴、土壇の関係を見ると、まず堅穴、土壇、溝状堅穴より、溝が後出するのは明らかである。土壇、堅穴群は前期後葉～末という期間のなかでも若干の先後関係がある。まずSK-13、SK-16、SK-19などの大型円形貯蔵穴が作られ、溝状堅穴SK-18もほぼ同時期に作られる。同時、もしくはやや遅れて小型円形堅穴と方形堅穴は前期末～中期初頭まで構築される。溝が掘られたのは、小型円形堅穴の内、最も新相を呈すSK-46よりも後で、中期初頭かそれ以降である。

住居跡出土遺物はほとんどが上層から出土しており、流れ込みと思われる。切り合いでは大型円形貯蔵穴SK-19よりも後になる。図5で、小型円形堅穴の遺構配置をみると、調査区南側に集中しており、住居跡と重複しない。小型円形堅穴の内、新しいものと住居跡をセットでとらえることも可能である。住居跡は一基しか確認できなかったが、ここは口当たりの良い台地の東南斜面にあたり、本来は調査区外に住居群が展開していたであろう。

また、住居が貯蔵穴群よりも後出し、溝と併存することも考えられる。森山遺跡の昭和62年度大分県教育委員会の調査では、集落が溝や空地帯により、いくつかの居住単位に区画されている様子が報告されている。今回の溝と形態が類似しており、SD-1,2がSH-1を含む住居群と他の空間を区画する溝であったとも推定できる。いずれにせよ、調査区の周囲がすでに削平をうけていることが残念である。

## 3、おわりに

これまで、中津地方では弥生時代前期の資料に恵まれなかった。前期末～中期初頭のものとしては、森山遺跡、大池南遺跡、上ノ原横穴墓群ピット内、同1号土壇墓などから出土しているが、いずれも少量である。中でも森山遺跡は大分県教育委員会と三光村教育委員会が3か年にわたり調査した弥生集落で、弥生時代前期末～後期初頭までの集落全域を調査できた、貴重な遺跡である。その主要遺構は中期後半で、中期前半～中頃はわずかながら出土が認められるが、やはり資料不足であった。しかし、近年福島島地上で、弥生時代中期の大集落がその姿を表してきた。以前より弥生土器、石器が採取されており、大規模集落の存在が予想されてきた場所である。平成5年度には二

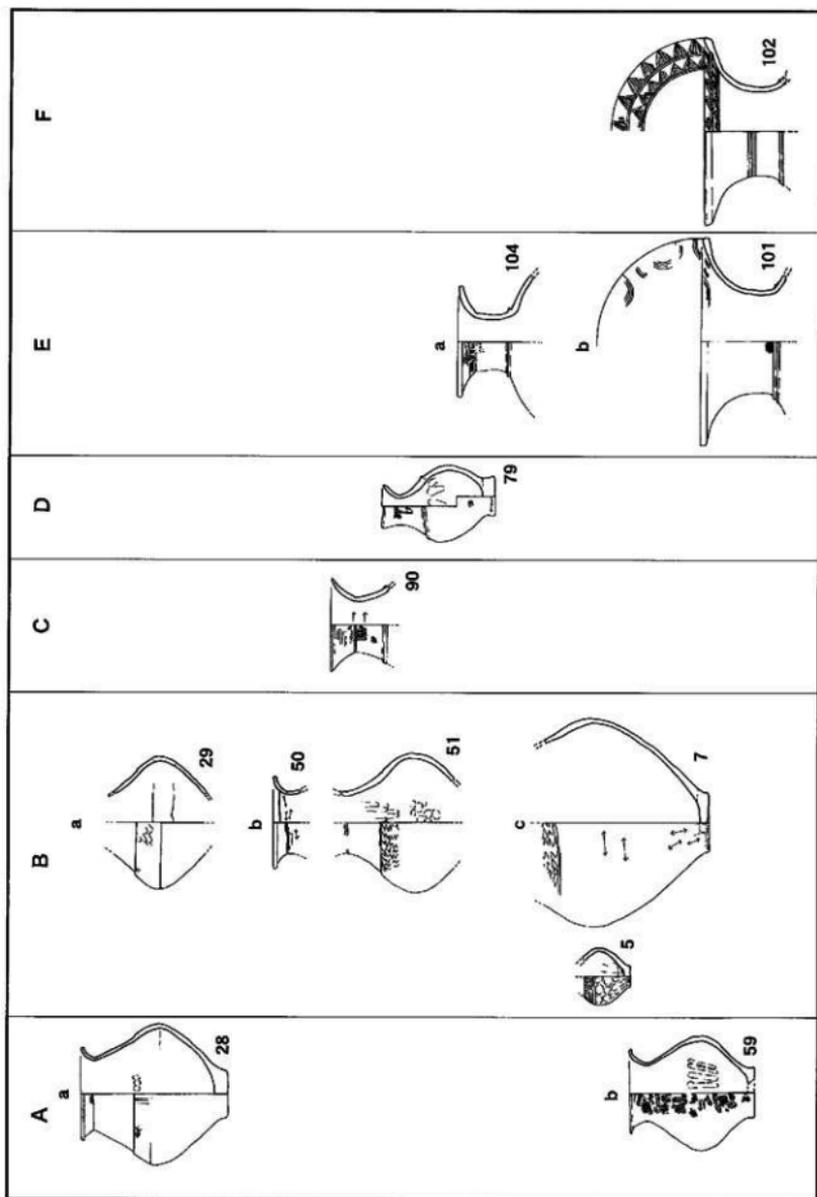


图29 壶分類圖 (S=1/10)

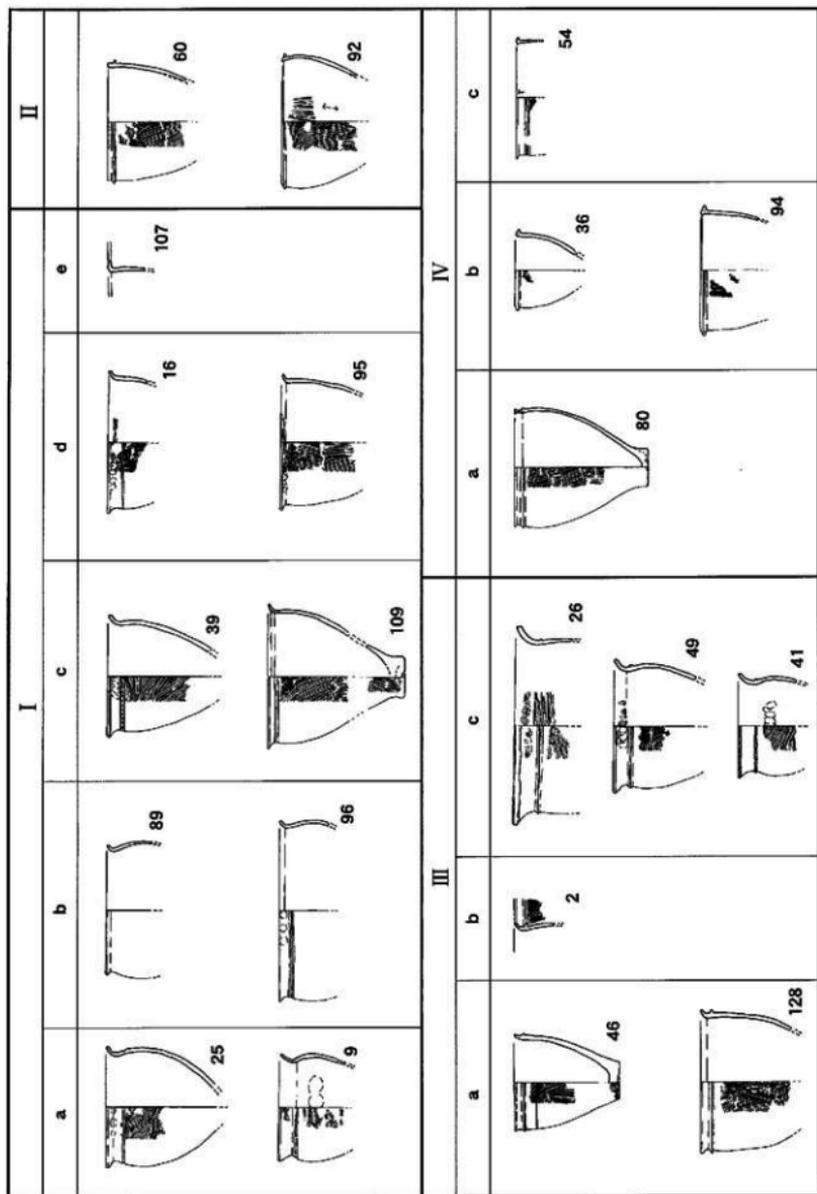


图30 甕分類図 (S=1/10)

列埋葬の墓域とそれに伴う祭祀土壘から、祭祀土器の良好な一括資料が得られ、平成7年度には、墓と同時期の遺物が大量に廃棄された溝が発掘された。8年度には溝の延長が見つかっており、福島台地は塚を持つ中期集落の存在が予想されている。上ノ原平原遺跡の始まりはこれらの遺跡に先行するものであり、欠如していた前期後葉の資料を得られ、前期末～中期初頭の土器組成を補強できたことは、大きな成果であった。前期の土器は、これまで宇佐市台ノ原遺跡や安心院町宮ノ原遺跡、行橋市下稗田遺跡などの周辺遺跡からおしはかるのみであったが、今回発見された土器は、中津という地理的環境から来る特徴を有した一群であった。大分側の、前期末～中期初頭の代表格である下城式土器を持つものの、その内多くの壘が如意状を意識し口縁部を屈曲させる。壘では、如意状口縁の比率が高いが、それらの壘の大半には関門、瀬戸内の影響である沈線が施される。板付系の壘には瀬戸内の影響で貝殻復縁押圧による文様が施されている。中津という地が北九州と大分の境であり、かつ沿岸部であるため各地からの影響をブレンドした形、構成比を生み出している。

当遺跡はその四方を削平されているが、幸いにも東側の大分県教育委員会の調査区まで遺跡の広がりが確認されている。方形や円形の堅穴群、住居跡が発見されており、その範囲は図2内に示している。出土土器より時期も重なるものと思われる。中津市教育委員会側の調査区が台地の傾斜部で、その台地のさがった縁辺部分に大分県教育委員会側の調査区があり、一つの集落単位となることが予想される。

今回は、当遺跡の狭い範囲での資料のみをあつかったが、今後大分県教育委員会側の資料が加算されることで、充実することは言うまでもない。今回未消化だった部分の補強、訂正を大いに期待するところである。

#### 参考文献

- 大分県教育委員会「台ノ原遺跡」『大分県文化財調査報告第33集』1975
- 新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」『新吉富村文化財調査報告第3集』1978
- 大分県教育委員会「大分県史先史編」1982
- 安心院町教育委員会「安心院宮ノ原遺跡」1984
- 真野和夫「下城式土器文化の研究2」『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要Vol.2』1984
- 下稗田遺跡調査指導委員会「下稗田遺跡」『行橋市文化財調査報告書第17集』1985
- 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓Ⅱ」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』1991
- 大分県教育委員会「大池南遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』
- 大分県教育委員会「森山遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』1992
- 大分県教育委員会「森山遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』1994
- 中津市教育委員会「沖代地区糸里跡 福島遺跡東入垣地区」『中津地区遺跡群発掘調査報告(Ⅶ)』1996
- 中津市教育委員会「沖代地区糸里跡(Ⅱ) 福島遺跡東入垣地区(Ⅱ)」『中津地区遺跡群発掘調査報告(Ⅸ)』1997



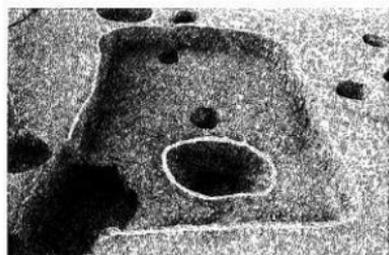
北から南を望む



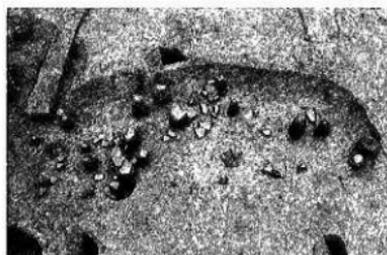
西から東を望む



SD-1



SK-2



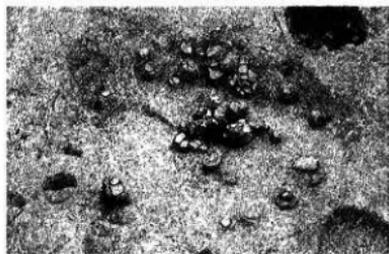
SK-7



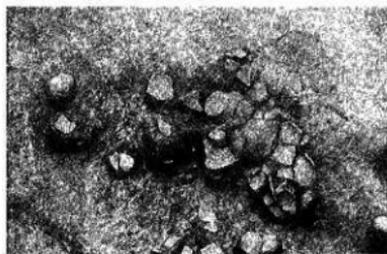
SK-8



SK-10



SK-13



SK-13



SK-16



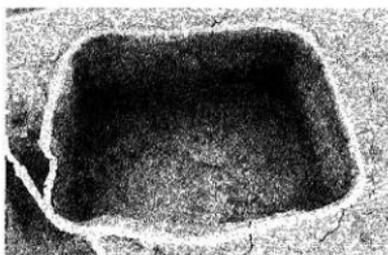
SK-18



SK-19



SK-34



SK-35



SK-36



SK-37



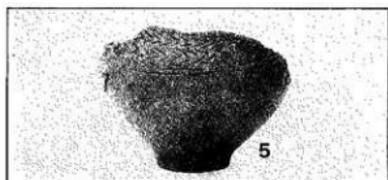
SK-39



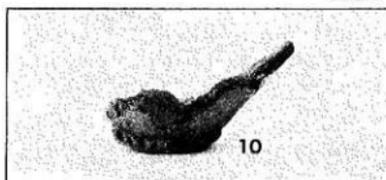
SK-46



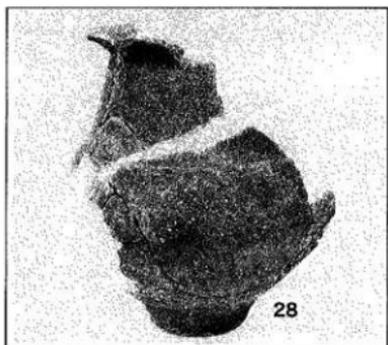
SK-73



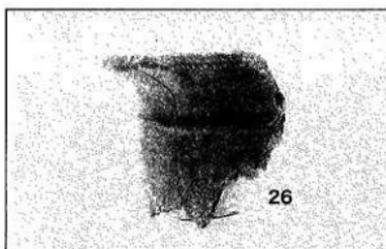
SK-7



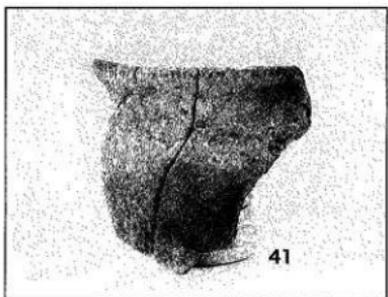
SK-8



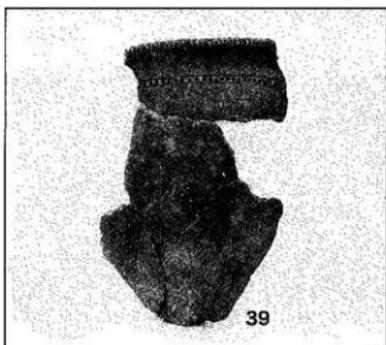
SK-13



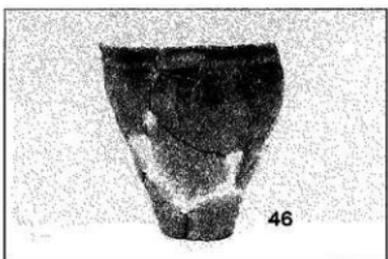
SK-13



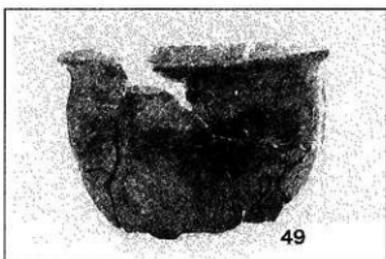
SK-18



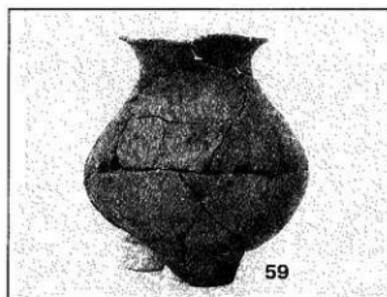
SK-18



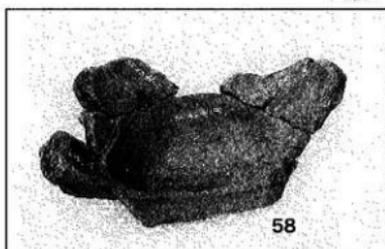
SK-19



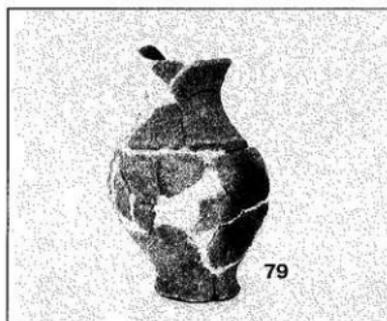
SK-19



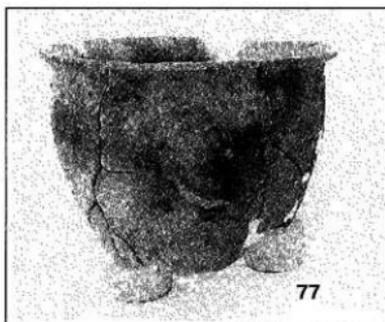
SK-25



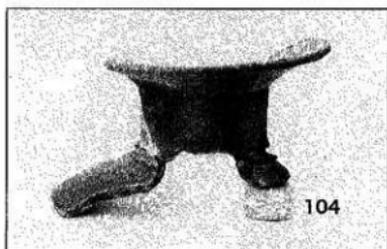
SK-25



SK-37



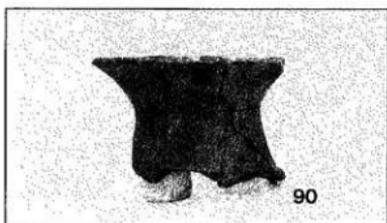
SK-36



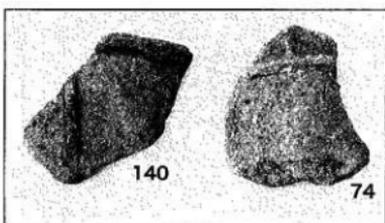
SK-37.48



SK-38

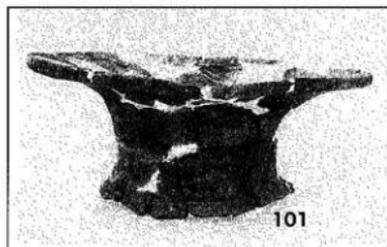


SK-43



SH-1

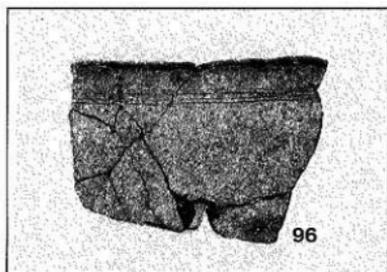
SK-35



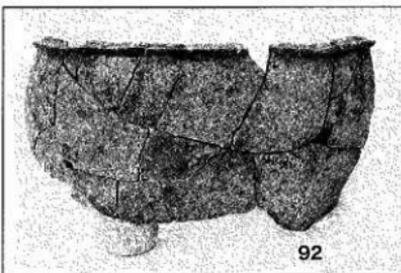
SK-46



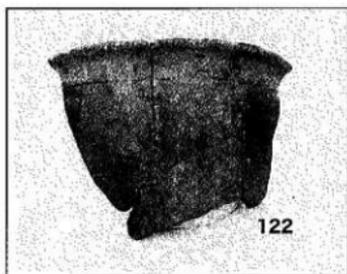
SK-46



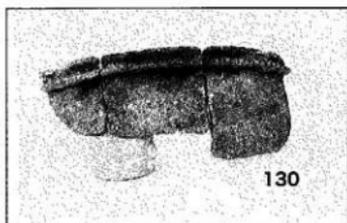
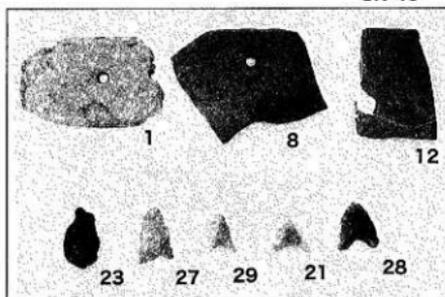
SK-46



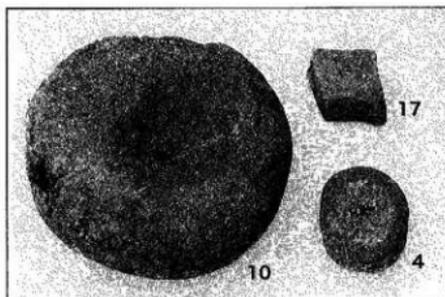
SK-46



SK-66



SK-73



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	うえのはるひらばる							
書名	上ノ原平原 A 遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	高崎 章子							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	1998年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのはるひらばる 上の原平原 A 遺跡	大分県中津市 大字相原 2803-14.69.73	44203	103001	33° 33' 27"	131° 11' 47"	19970909 ～ 19971217	1,927㎡	ガソリン スタンド 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
うえのはるひらばる 上の原平原 A 遺跡	集落	弥生	住居跡 土版	弥生土器		弥生時代前期末の貯蔵 穴群		

### 上ノ原平原 A 遺跡

中津市文化財調査報告 第20集

1998年3月20日

発行 中津市教育委員会

印刷 鶴川原田印刷社